トランプ王国がまだ平和だった頃。アン王女には一匹の妖精がいました。名前はジェスターと言い、アン王女を楽しませる宮廷道化師として産まれた妖精でした。

ジェスターは、トランプショーを行ったり、帽子からハトを取り出すマジックを披露したりして、アン王女を楽しませました。

好奇心旺盛なアン王女はジェスターが次々と繰り出す魔法のような手品に魅了され、思いっ切り可愛がったのでした。

アン王女の愛情をこれでもかと感じたジェスターは、もっともっとアン王女を楽しませようと、芸に励むのでした。

穏やかな日々はいつまでも続くように思われました。

ですが、アン王女が王国のナイトであるジョナサンと婚約した時から、状況は変わりつつありました。

アン王女はジョナサンと過ごす時間が増え、逆にジェスターと触れ合う時間は少なくなっていきました。次第にジェスターはジョナサンにジェラシーを抱くようになりました。

そしてジェスターは思ったのでした。宮廷道化師ではなく、ジョナサンのようにアン王女を護れる力を持ったナイトになりたいと――。

序章・復活のジョーカー

「ようやく見つけたな。こんな所に落ちていたか」
ベールはある荒野の片隅に打ち捨てられていた、漆黒の泥のような塊を発見した。
「ちょっと何よこれ！　ただの塊じゃない！！」
こんなのを探すために三日三晩付き合わされていたのかと、マーモは憤る。
「まったくだぜ！　おい、ベール。これは一体なんなんだよ？」
イーラはマーモに頷きつつ、詳細を訊ねる。
「こいつは闇の黒い絵の具。世界をバッドエンドに染めようとしたピエーロが、消滅の間際に吐き出した残骸だ」
我々より少し前この星を侵攻し、スマイルプリキュアに敗れたとベールは語る。
「スマイルプリキュア？　あいつ等以外にもプリキュアがいるのか？」
「ああ。メルヘンランドという世界に伝わるプリキュアがな」
トランプ王国以外の世界にもプリキュアが存在していると、ベールは語る。
「あまりいい話じゃないわね。もしドキドキ！プリキュア共と組まれでもしたら」
ただでさえ思わしくない戦況がますます悪化してしまうと、マーモは頭を抱える。
「その通りだ。だからこそ、先手を打つ必要があるのだよ」
そう言い、ベールはジャネジーを残骸に流し込む。
「おい、ベール！　何してやがるんだ！？」
貴重なジャネジーを徒に使う行為に、イーラはベールの正気を疑った。
「黙っていろ。これはキングジコチュー様のご命令だ」
「キングジコチュー様の？」
それなら命令に従うしかないと思いつつ、一体なんの目的でとマーモは首を傾げる。
「さあ、甦れ！　ピエーロの忠臣、ジョーカーよ！！」
ベールが高らかに叫ぶと、闇の黒い絵の具はみるみる人の形へと変化していく。
「うっ……。ここは、あなた方は……？」

ジャネジーの力によって復活したジョーカーは、朦朧とした意識の中訊ねる。
「我々はキングジコチュー様に仕える者だ」
「キングジコチュー。初めて聞く名ですね。しかし……」
私がこうして無事だということは、ピエーロ様は見事勝利し、世界はバッドエンドに包まれたのですねと、ジョーカーは胸を撫で下ろそうとする。
「いいや。残念ながら、プリキュア共に敗れた」
もしもこの世界がバッドエンドに染まっていたのなら、我々ジコチューは侵攻しなかっただろうと、ベールは包み隠さず事実を語る。
「なっ、なんですって？」
そんなはずがないと、ジョーカーは激しく動揺する。
「あっ、ありえません……。しかし、もしそれが事実だとしたら、どうして私は存在しているのです！？」
ピエーロ様が敗れたのなら、ピエーロ様の一部となった自分も同時に消滅するはず。自分がこうして存在しているのがピエーロ様ご存命の何よりの証拠だと、ジョーカーは狼狽しながら力説する。
「いいや、お前がこうして存在しているのが、ピエーロが敗れた何よりの証拠だ」
「どういう意味ですか、それは？」
「キングジコチュー様はピエーロと親交があり、生前こう聞かれていた。『万が一自分がプリキュアに敗れた際、ジョーカーが復活の切り札となる』と」
「私が、ピエーロ様の？」
「そうだ。お前がピエーロの、最後の希望なのだよ」
だからピエーロはプリキュアに敗れる直前、取り込んだお前を吐き出したのだと、ベールは語る。
「おおおー。なんという寛大なお心遣い……。私のことをそこまでご信頼されていたのですね……」
誠心誠意ピエーロ様に仕え続けた苦労が報われたと、ジョーカーは心の底から感動する。
「そんなピエーロ様を消滅させたなど！　ゆっ、許せん、プリキュア共め！　ピエーロ様の仇、必ずや！！」
ジョーカーは今までの紳士的な態度から豹変し、汚い口調でプリキュアたちに激しい憎悪を向ける。

「その気持ち、分からんでもない。我々もプリキュア共に手を焼いているからな」
「あなた方も？」
「ああ。どうだ？　ここは一つ手を組んでみんか？　共にプリキュアを憎む者として」
ベールは説明する。我々ジコチューは、スマイルプリキュアとは別の、ドキドキ！プリキュアという名のプリキュアと戦っている。二つのプリキュアが協力し、より強大な存在になるのを阻止するのが、我々が同盟を結ぶ目的だと。
「無論、タダでとは言わん。ピエーロの復活には、我々も協力を惜しまん」
悪い話ではないだろうと、ベールはジョーカーに同意を求めようとする。
「もちろんです！　ピエーロ様復活に手を貸していただけるのなら、全身全霊を懸けてご協力いたしましょう！！」
ジョーカーは即断し、ベールに握手を求める。
「ああ。互いのためにもな」
ベールはニヤリと笑いつつ、ジョーカーの握手に応じる。
（ククク。せいぜい利用してやるぞ。哀れな道化師め）
こちらの思惑通りにジョーカーを取り込めたことに、ベールは心の奥でほくそ笑んだ。
ジョーカーは知らなかった。自分がピエーロに生かされた本当の意味を。そして、自分が何者であるかを。

ジェスターは思いました。小柄で非力な自分は、どうやればアン王女をお守りすることができるのだろうと。

考えた末ジェスターが閃いたのは、自分の手品を武器にするというものでした。いつもはショーに使うだけのトランプを武器にすれば、自分より大きな者とも戦えるようになると、ジェスターは思い立ったのでした。

第一章・ドキドキな出会い！　二つのプリキュア

「うーん。まこぴーのサイン会だなんて、ドッキドッキだよ〜〜！」

ある日。剣崎真琴の新曲、「こころをこめて」を収録したシングルＣＤの発売を記念した店頭販売＆サイン会が催され、相田マナは胸をドキドキさせながら、サイン待機列に並んでいた。

「まったく。真琴のサインならいつでも貰えるって言うのに」

それなのにわざわざ進んで列に並ぶんだからと、マナの行動を遠目で見つめながら菱川六花は苦笑する。

「ですが、友達としてではなく一ファンとしてサインをいただきたいというのは、いかにもマナちゃんらしいですわ」

この間はあんなにも真琴さんのサインを欲しがっていましたのに。いざサイン会が催されるとなると、他のファンに申し訳ないからと、自分の気持ちを抑えてまで律儀に並ぶ。

そんなマナちゃんの他の方々を思いやる心は素敵ですわと、四葉ありすは六花の側でにこやかに微笑む。

「二人ともゴメンね。休みの日にわざわざ販売の手伝いをしてもらって」

人間形態になっているダビィが、六花とありすに両手を合わせて謝る。

予め発売したＣＤを持参の人もサインが貰えるため、当日買い求める人はそんなにいないだろうと見積もっていた。

しかし、予想以上に店頭販売列に並んだファンの数が多く、販売スタッフの数が足りておらず、二人はダビィの頼みで手伝っていたのだった。

「いえ、いいんです。私がやらないと、マナが代わりにやりそうだし」

仕事を抱え込むのは、いつもマナの役割。だからこういう日くらいは自分が務めを果たさなきゃねと、六花は笑顔で応えるのだった。

「まったく、わたくしにも警備くらいできますのに」

「きゅぴらっぱー！」

一方、円亜久里は他の妖精たちと一緒に、店舗の従業員室でアイちゃんの子守りを任されていた。

小学生にアルバイトをさせるわけにはいかないという理由でスタッフから外され、亜久里は顔をプクーっと膨らませながら不快感を示した。
「そんなことないシャル。アイちゃんの子守りも、立派な仕事シャル」
自分だって人間の姿になってマナの代わりに手伝うのを我慢しているんだと言いつつ、シャルルは子守りの大切さを語る。
「そうだケル。いつジコチューたちが襲って来るか分からないケル」
六花たちがいない隙を狙って、ジコチューたちがアイちゃんを奪いに来るかもしれない。もしそんな事態になれば、自分たち妖精じゃ対処できない。だから亜久里がアイちゃんの子守りをする重要性は高いと、ラケルは力説する。
「この部屋には他の人たちが入って来ないようダビィが手配したから、大丈夫でランス～～」
アイちゃんや自分たちの正体がばれることはないだろうと、ランスは太鼓判を押すのだった。

「そうですわね。みなさんの分も、わたくしがアイちゃんを護らなければなりませんね！」
妖精たちに諭され、亜久里は気を持ち直してアイちゃんの子守りを続けるのだった。
（意外と大変ね。でも、すごく充実感があるわ）
ファンの一人一人にその場でサインをするのは右手への負担が大きく、今にでもつりそうな勢いだ。
しかし、こうしてじかにファンと触れ合うことができるのは、貴重な機会だ。反応に若干の差はあるけれど、みんな自分に笑顔を向け、声援を送ってくれる。
こんなにも自分は、多くの人たちに支えられていたんだ。ファンのみんなのためにも、アイドル活動をしっかりとがんばらなくてはと、真琴は心に誓うのだった。

「うーん。まこぴーのサインが貰えるだなんて、ウルトラハッピー！！」
マナの少し後方には、満面に笑みで列に並ぶ星空み

ゆきの姿があった。みゆきは真琴が白雪姫を演じた映画、スノーホワイトでの迫真の演技に惹かれ、すっかりと真琴のファンになっていた。

近くの街でサイン会が催されると聞くや否や、大興奮で他の四人を誘いながら飛んで来たのだった。

「剣崎真琴。なんていい名前なのかなぁ。どこかキリッとしてクールな雰囲気もあるし。来年のライダーに出演してくれないかなぁ」

みゆきに誘われたとはいえ、黄瀬やよいはみゆきと違った意味合いでサインを貰うのを楽しみにしていた。

真琴の名前は、仮面ライダーブレイドに変身する剣崎一真と一字しか違わない。その妹なのじゃないかと錯覚するほど似通った名前に、デビュー当初から注目していたアイドルだったのだ。

「サイン、なんて書いてもらおうかな？　ここはやっぱり、スノーホワイトの台詞だよね！」

映画のワンシーンの台詞入りサインを貰って一生の宝物にすると、みゆきは大はしゃぎだ。

「わたしはやっぱり、オンドゥルルラギッタンディスカーかなぁ」

一方のやよいは、ブレイドのある意味有名な台詞を書いてもらおうと、変な方向に意気込む。

「いや、みゆきはともかく、やよいのは本人分からへんやろ」

すかさず日野あかねがツッコミを入れる。清純派アイドルな真琴が、やよいのようにスーパーヒーローにのめり込んでいるわけないと。

「そうですね。私はやはり道と……」

若干十四歳にしてアイドルという道を歩み続けている真琴。生半可な覚悟では到底歩めぬ道をいかようにして潜り抜けているのか。その思いを道という文字で表現して欲しいと、青木れいかは思うのだった。

「れいか、それはサインやのうて書道やないか？」

れいかのことだから筆を持参してサイン色紙に一筆書いてもらいそうだと、あかねは思わずにはいられなかった。

「全然進まないなぁ。もうお腹ペコペコ……」

並び始めてかれこれ三十分経過するが、一向に真琴

の元へ辿り着けそうにない。あと三十分もしたら空腹の限界だと、緑川なおは腹を擦る。
「テレビとかＣＭでよく見かけるけど、ここまで人気なんだぁ」
　まるでシンデレラみたいだと、みゆきはウキウキしながら並び続けるのだった。
「おい、お前！　勝手に割り込んでんじゃねーよ！」
「ウルセー！　連れが並んでたんだからいいじゃねーかよ!!」
　そんな時だった。みゆきたちの前方で、何やらファン同士の衝突が巻き起こっていた。喧騒に耳を傾ける限り、どうやら途中で列から抜け出して戻って来たことで、一悶着起こっているようだ。
「何、揉め事!?　急がなきゃ！」
　いち早く気付いた六花は、駆け足で現場に向かった。騒動は確かに問題だ。でもそれ以上に、マナの動向が気になる。マナのことだ、いつものように仲裁に入ろうとするに決まっている。
　今のマナは生徒会長でも販売のお手伝いでもなく、一ファンとしてここにいるんだ。だから自分が率先して事態を収拾しなければならないのだと。
（どうしよう？　なんとかしなきゃ。このままじゃ、他のまこぴーファンも悲しんじゃうよ）
　一方のみゆきも、騒動に心を痛めていた。ファン同士での小競り合いで、みんなから笑顔が消えちゃう。それだけはなんとしてでも避けなければならないと。
「うーん。気持ちは分からんでもないけど」
　確かに長く並び続けていたら、途中で列を抜け出したくなるのも理解できる。
　しかしそれは、あくまで自分たちみたく友達同士で並んでいる人にしかできない行為。一人身として目の前でやられたら、そりゃ腹も立つわなと、あかねは双方に理解を示しつつ動向を見守る。
「ここで颯爽と飛び出して解決するのがスーパーヒーローなんだけど、まこぴーのサインも欲しいし」
　止めに入ったら、また後ろから並び直さなきゃならない。そのリスクを考えると、勢いだけでは飛び出せないと、やよいはまごまごしていた。

「このような争い事、見過ごすわけにはいきません！私が人として正しい道を説かなければ！」
　そんな中れいかは、マナーを教え込まなければならないと、一人身を乗り出して仲裁に入ろうとする。
「はいはーい。二人とも、ストップ、ストーップ！」
　そんな時だった。誰よりも早くマナが、いがみ合う二人のファンの間に割って出たのだった。
「なんだテメェは？」
「邪魔すっと容赦しねぇぞ、オラァッ！」
　既に一触即発だった二人のファンは、介入して来たマナに激しい罵声を浴びせる。
「まあまあ、落ち着いて。喧嘩の原因は割り込みみたいだけど、確かにマナー違反かな？」
　マナは二人にまったく臆せず、割り込んだ者に非があるという指摘をする。
「でもさ、例えばトイレを我慢し切れなくて途中で抜け出しちゃったりするのは仕方ないと思う。無理に並んで身体壊しちゃった方が、余計に周りのみんなに迷惑かけちゃうでしょ？」
　途中で抜け出した人にも理由があるんだと、割り込まれた方のファンにも怒りを収めるよう話しかけるマナ。その手慣れた様に、二人とも次第に怒りを静めていく。
「それにさ、ファンの人たちがケンカしてたら、まこぴーも悲しむと思うよ。二人ともファンなら、大好きな人の悲しい顔なんかみたくないよね？」
　まこぴーファンに悪い人なんかいない。だからもう争うのは止めて、仲直りの握手をしよと、マナは二人の手を優しく繋ぎ止める。
「あっ、ああそうだな。ゴメンな、お前の気持ちも考えず、勝手に割り込んだりして」
「いやいや。そっちにもどうしても抜け出さなきゃならない理由があったんだろ。俺の方こそ自分勝手に怒り出してゴメン」
　そうしてマナの巧みな話術により、二人のファンは笑顔で和解の握手を交わしたのだった。
「スゴイ、あの娘。あっという間に仲直りさせちゃった……」

わたしが思い悩んでいる間に、颯爽と解決して笑顔を取り戻した。その手際の良さに、みゆきは感動した。

「見事なものです。あのお方は恐らく、幾度となくこのような場面に遭遇した経験をお持ちなのでしょう」

一朝一夕では不可能な、鮮やかな手腕。その道を極めし者にしかできない行為だと、れいかはマナを絶賛する。

「あーあ。やっぱりマナが解決しちゃったか」

一足遅かったかと、六花はガックリとうな垂れる。

「まったく、今日のマナは真琴のファンとして来たんでしょ？　だったら揉め事の解決は私たちに任せて欲しかったな」

「えへへ、ゴメン六花。みんなが困っているところを見ると、つい放っておけなくなるんだ」

頭で考えるより先に身体が動いちゃったと、マナは頭をかきながら平謝りする。

「相変わらずマナは、愛を振り撒き過ぎなのよ。ホントにもう、幸せの王子なんだから」

（えっ！？）

六花がマナを幸せの王子に例えた瞬間、みゆきは胸がドキッとした。

「どうかしたん？　みゆき。そないな顔して」

「えっ！？　ううん、なんでもないよ」

だがあかねに呼びかけられ、みゆきは笑顔で誤魔化した。

（幸せの王子。確かにあのマナって呼ばれていた娘の行為は、幸せの王子みたい。だったら……）

あの娘は、わたしが長年抱いていた疑問を解決してくれるのだろうか？　みゆきのマナに対する想いは、確かに芽生えつつあったのだった。

「よーし！　まこぴーのサインゲット！　これをネットオークションに出品して、一儲けしてやるぜ！！」

その頃。ある男は何やらよからぬことを画策して、プシュケーを濁らせ始めていた。この男は真琴のファンというわけでもなく、高額が期待されるサインを最初から転売する目的で並んでいたのだった。

「うーんでもなぁ。そんなことしたら……」
あんなに自分のために懸命にサインをしてくれたまこぴーに申し訳ない。これを機会にまこぴーのファンを始めるのも悪くはないと思い直し、プシュケーの濁りも収まりつつあった。
「売ってしまってもいいんじゃないか？　無理くりファンになるよりは、よっぽど有益だぞ？」
しかし、プシュケーの変化を見逃さなかったベールに付け込まれ、男のプシュケーは一気に漆黒へと染まっていく。
「ぐあああー！？」
「暴れろ！　お前の心の闇を解き放つのだ！！」
ベールは男からプシュケーを取り出し、ジコチューを生み出す。
「ヤーフ、ヤフーオクー！　サインを売って一儲けするオクー！！」
そうして誕生したジコチューは、オークションで競り落とす時に使うハンマーを持った、がま口財布に手足が生え、中央部にカウンターが付いた姿をしていた。

「何！？　まさかジコチュー！？」
いち早く異変に気付いた六花は、急いで現場に駆け付ける。
「皆さん、早く逃げてください！！」
ありすはジコチューの出現で戸惑う人々を、誘導して逃がすのに務めるのだった。
「ファンの人たちの楽しみを踏みにじるなんて、許せない！」
自分のために集まってくれた多くのファンを悲しませる行為に、真琴は鋭い視線でジコチューを睨むのだった。
「早く倒して、サイン会を再開させなきゃね！　みんな、行くよ！！」
マナのかけ声により、五人は変身を始める。
『プリキュア、ラブリンク！』
マナ、六花、ありす、真琴の四人は、ラブリーコミューンにＬ・Ｏ・Ｖ・Ｅの文字を描き、光に包まれながら変身していく。
「プリキュア、ドレスアップ！」

一方の亜久里は、ラブアイズパレットを使用し、メイクアップすることで成長した姿に変身するのだった。
「みなぎる愛！　キュアハート！！」
両手いっぱいで愛を振りまくようなポーズを取る、黄色のポニーテールに、ピンクを基調としたコスチューム姿。相田マナが変身したキュアハートだ。
「英知の光！　キュアダイヤモンド！！」
青色のロングヘアに、両側頭部から垂れ下がるカールがかったヘアが特徴的な姿。菱川六花が変身したキュアダイヤモンドだ。
「陽だまりポカポカ！　キュアロゼッタ！！」
可愛らしい仕草で両手をポンと叩き、内股なポージングを取る、橙色のツインテールが腰まで伸びた姿。四葉ありすが変身したキュアロゼッタだ。
「勇気の刃！　キュアソード！！」
両手で手刀を振るい、背中を魅せるポーズを取る、薄紫色のサイドテール姿。剣崎真琴が変身したキュアソードだ。
「愛の切り札！　キュアエース！！」

他の四人より少し大人びた赤色のロールヘアに、深紅と白を基調としたコスチューム姿。円亜久里が変身したキュアエースだ。
「響け！　愛の鼓動！！　ドキドキ！　プリキュア！！」
そして五人が変身し終えると、揃って決めポーズを取るのだった。
「愛を失くした悲しいおサイフさん。このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」
キュアハートが左胸のハート形のポーチに合わせるように、両手でハートの形を作りながら、ジコチューに宣言する。それが合図となり、両者は戦闘を開始するのだった。

「何、あの敵？　まさか、アカンベェ！？」
突如出現したジコチューに、みゆきは驚愕した。まさか倒したはずのバッドエンド王国が復活したのかと、背筋がビクッとなった。
「変身しなきゃ！」

相手がなんであれプリキュアになって戦わなきゃと、みゆきはスマイルパクトを掲げようとする。
「待つんや、みゆき。あれを見てみ！」
「えっ？　あれはっ！？」
声を上げて指差すあかねに促され、視線を向ける。するとそこには、特徴的なコスチュームに身を包んだ、五人の姿があった。
「もっ、もしかして、新しいプリキュア！！」
未知の敵と対峙するニューヒーロー。自分たちの後継となる、新プリキュア。さながらスーパー戦隊の交代劇のような展開に、やよいはキラキラと目を輝かせた。
「確かにあの姿はプリキュアかもしれないけど……」
自分たち以外にも存在するのかなと、なおは首を傾げる。
「詳細は分かりませんが、戦闘はあの人たちに任せておいた方がいいかもしれませんね」
れいかは戦況を冷静に分析する。新たな敵が出現した瞬間、周囲はバッドエンド空間のような特殊空間に包まれなかった。
つまり戦闘時はアカンベェとは違い、実世界に少なからず損害をもたらす危険性があると。
「ですから私たちは、ファンのみなさんの避難の誘導を、最優先で行うべきだと思います」
「せやな。新プリキュアのお手並み拝見といこうか」
確かにれいかの言う通り、ファンのみんなの安全確保に専念した方が良さそうだと、あかねは頷く。
「そうだね！　ここぞって時に颯爽と駆け付けるのが、先代ヒーローの務めだよね！！」
それがムービー大戦に代表されるスーパーヒーロー物の王道展開だと、やよいは鼻息を荒くしながら、やや興奮気味に力説する。
「そうと決まれば、早速行動しなきゃ！」
素早く避難活動を終えて、新プリキュアを支援するぞと、なおは袖を捲りながら気合を入れる。
「がんばってね、新しいプリキュアのみんな！」
ドキドキプリキュアの背中にエールを送りつつ、みゆきは避難活動に移るのだった。

「うふふ。あれがベールさんたちの言う、新たなプリキュアですか。まずはお手並み拝見といきましょう」
共闘の約束をしたが、敵の戦力分析を行うのが先だと、ジョーカーは不敵な笑みを浮かべながら、上空で戦況を傍観し続けるのだった。
「ヤーフ、ヤフーオクー！　オレ様の欲しい物は、全部競り落としてやるオクー！！」
ジコチューはハンマーを振るいながら意気盛んに叫ぶが、一向に攻撃する気配がない。
「先手必勝よ！　閃け！　ホーリーソード！！」
さっさと倒してサイン会を再開させなきゃと、ソードは右手を振りかざし、剣状のエネルギー波をジコチューに放つ。
「ジッ、ジコチュー！？」
ジコチューは回避することなく、ホーリーソードの直撃を食らう。
「やったぁっ！　じゃあ早速……」
ソードの攻撃が直撃したとはしゃぎ、ハートは早くも必殺技で浄化しようとする。
「気に入ったオクー！　その技、競り落としてやるオクー！！」
しかしジコチューは立ち上がり、勢いよくハンマーを振り回す。すると、胸元のカウンターがグルグルと回り始める。
「最低落札価格、二十万円からオークション開始オクー！」
カウンターの数字が二十万円で止まると、ジコチューは唐突にオークションの開始を宣言する。
「えっ！？　オッ、オークションって？」
オークションの存在自体知らないソードは、敵の意図がまったく分からず、あたふたするだけだった。
「他に競り落とす奴はいないヤフー！　ホーリーソードは、二十万円で落札オクー！！」
その間にもオークションは終了し、ジコチューはハンマーを力強く振り下ろす。
すると、ハンマーが光り輝いたかと思うとがま口が

開閉し、中から大量の百円玉が流れ出る。
「わっ！？　何、何！？」
まるで濁流のように襲いかかるコイン攻撃に、ハートはあたふたとしながらジャンプして回避する。
「ホーリーソードを落札って、どういうこと？」
一体ジコチューは何をしたのだろうかと、ソードは態勢を立て直しつつ警戒する。
「閃くオクー！　ホーリーソード！！」
ジコチューはハンマーを振りながら、ソードの必殺技を叫ぶ。次の瞬間驚くべきことに、がま口の中からホーリーソードが発射されたのだった。
「ウソッ！？」
まさか敵が自分の必殺技を使うとは夢にも思わず、ソードは動揺して足がすくんでしまう。
「カッチカチの、ロゼッタウォール！！」
ロゼッタは咄嗟にソードの前に出て、ロゼッタウォールで攻撃を防ぎ切る。
「ありがとう、ロゼッタ。それにしても、どうして？」
ジコチューが自分の技を使えるんだと、ソードは首を傾げる。
「相手はオークションで落札したって言ったわよね。恐らく、欲しい物をオークションで競り落として、自分の物にするっていう攻撃ね。ソード、試しにホーリーソードを撃ってみて」
「分かったわ。閃け！　ホーリーソード！！」
ダイヤモンドに促され、ソードはもう一度ホーリーソードを放とうとする。
「えっ？　そんなっ！？」
しかし、ホーリーソードは発動せず、ソードは愕然とする。
「思った通りね。迂闊に攻撃すれば、こちらの攻撃は全部競り落とされてしまうわ」
「厄介ですわね。容易に戦闘を終わらせられなければ、こちらが不利になってしまいますわ」
ダイヤモンドの分析通りなら、簡単に倒せる相手ではない。戦闘が長引けば、五分のタイムリミットがある自分は圧倒的に不利だと、エースは顔を曇らせる。
「次はロゼッタウォールオクー！　二十万円から競売

開始オクー！！」
　ジコチューは続けざまに、今度はロゼッタウォールを自分の物にしようとする。
「まあ、困りましたわ。今手元には持ち合わせていませんので」
　ロゼッタは焦り顔を見せず、少々お待ちくださいと言いつつラブリーコミューンの携帯電話機能を使い、どこかへ連絡を取る。
「ロゼッタウォールは二十万円で落札オクー！」
　しかし、自己中なジコチューが相手を待つはずもなく、あっさりとロゼッタウォールは落札されてしまう。
「どっ、どうしよう……。ホーリーソードだけじゃなく、ロゼッタウォールまで落札されちゃった」
　防御手段まで奪われてますます倒しにくくなっちゃったと、ハートはあたふたする。
「手がないわけじゃないわ、ハート」
　相手はオークションによって技を奪う。ならばこちらからオークションを持ちかけ競り返せばいいのだと、ダイヤモンドは語る。
「グッドアイディア！　でもお金はどうしよう？」
　お小遣いは五千円くらいしか持ってないよと、ハートはどんよりとした顔をする。
「幸い、手元にはジコチューが競り落とした分の四十万円があるわ。でも……」
　恐らく相手はベットして金額を上げてくる。最低でもこの倍の金額がないと競り返せないと、ダイヤモンドは頭を悩ます。
「お金ならあるわ！」
　そんな時、ソードが声を上げる。今日の店頭販売での売り上げがあると。
「ひい、ふう、みい……。全部で九十万円あるわ！」
　ソードは札束を数え、売上金額を報告する。
「上出来よ、ソード。それだけあれば」
　十分取り戻せると、ダイヤモンドは明るい顔をする。
「でもいいの、ソード？　そのお金は」
　ファンの人たちからいただいたお金だ。それを敵に渡してしまっていいものだろうかと、ハートは不安気な声で訊ねる。

「構わないわ。元はと言えば、迂闊に攻撃した自分のせいだし」
だから自分の尻拭いは自分ですると、ソードはオークションをジコチューに仕掛ける。
「あなたに取られたホーリーソードを取り戻すわ！落札価格は五十万円からよ！！」
ソードが落札物と金額を指定して、オークションが始まった。
「ならばこちらは六十万円オクー！」
すぐさまジコチューはベットして、落札価格をせり上げる。その後は十万円単位での攻防が続いた。
「百三十万！」
とうとうソードは、落札限界額の百三十万円を提示してしまう。
「ならばこっちは二百万円オクー！」
しかしジコチューは、あっさりとソードの限界額を超えた額をベットする。
「二百万！？」
追加でベットするには、最低でもあと七十万欲しい。すぐさまそんな金は用意できないと、ソードは狼狽する。
「これ以上ベッドがないなら、ホーリーソードは二百万で……」
「お待たせしました、お嬢様！」
そんな時だった。突然セバスチャンが車で駆け付け、アタッシュケースをロゼッタに手渡す。
「ご命令通り、四葉銀行からお嬢様のご預金を全額引き出して参りました」
「まあ。ありがとうございます、セバスチャン。では僭越ながら、わたしがベットしますわ。金額はとりあえず、一千万円で」
ニッコリと微笑みながらアタッシュケースを開け、金額を提示する。ケースの中には、確かに一千万円以上の札束がギッシリと詰められていた。
「いっ、一千万オクッ！？」
金額を聞いた途端、ジコチューが目玉を見開く。胸のカウンターはグルグル回り出すが、九百九十九万九千九百九十九円で止まってしまう。どうやらジコチュ

ーは、七桁以上の金額を支払えないようだ。
「無理なようですね。それでは一千万円で、ホーリーソードは返していただきますわね」
そしてロゼッタは、見事ジコチューに競り勝つのだった。
「やったぁっ！　さすがはロゼッタ!!」
「にしても、あのケース。どう見ても一億円は入っているわね……」
若干十四歳でそれほどの貯金を持っているのかと、満面の笑みで喜ぶハートとは対照的に、ダイヤモンドは苦笑する。
「では続けて、わたしのロゼッタウォールを返していただきますね。金額は一千万円から」
ロゼッタは間髪入れずに、再びオークションを仕掛ける。
「ヤッ、ヤフオクー！　どっちも渡さないオクー！　オレ様の物オクー！」
しかし、ジコチューはホーリーソードを返さないばかりかロゼッタから提示されたオークションも拒否して、怒り心頭にハンマーを振り回す。
「自分が競り落とせないからといって逆ギレするなんて、どこまでも自己中な奴ですわね」
あまりに自分勝手な振る舞いの数々に堪忍袋の緒が切れたと、エースは憤る。
「でもこれでもう、ジコチューに技を奪われることはなくなったわ。ハート、今よ！」
トドメを刺す絶好のチャンスだと、ダイヤモンドが呼びかける。
「うん！」
ダイヤモンドに促され、ハートはマジカルラブリーパットを出現させようとする。
「いやはや。なかなかの腕です。ドキドキプリキュアのみなさん」
だが、そんな時だった。突然五人の前に拍手をしながらジョーカーが姿を現した。
「えっ？　誰っ？」
突然の来訪者に戸惑い、ハートは思わず名を訊ねる。
「紹介しておこう、プリキュアの諸君。この方はバッ

ドエンド王国の幹部、ジョーカーだ」
「バッドエンド王国？　聞いたことのない国ね」
恐らくは、トランプ王国とは違った別世界の王国なのだろう。いずれにせよ、ベールに紹介された以上敵対する存在には変わりないだろうと、ソードは警戒心を強める。
「以後お見知り置きを。これはお近付きの印です」
ジョーカーは丁寧にお辞儀をしたかと思うと、ニヤリと笑いながら闇の黒い絵本を取り出した。
「世界よ、最悪の結末、バッドエンドに染まりなさい！白紙の未来を黒く塗り潰すのです！！」
そして闇の黒い絵の具で塗り潰し、バッドエンド空間を発生させる。
「なっ、何この感じ？！」
バッドエンド空間の展開により、ダイヤモンドは不快感を抱き、軽く膝を付く。
「ですが、この程度ならまだ戦えますわ！」
多少気分が悪くなった程度なら戦闘に支障はないと、ロゼッタは敢然と敵に立ち向かおうとする。
「流石はプリキュアの皆さん。違うプリキュアとはいえ、簡単にバッドエナジーは吸収できませんか」
「違うプリキュア？　どういうこと？」
もしかして、わたしたち以外にもプリキュアがいるのと、ハートは訊ねる。
「ええ。ですが今はそんなことを訊くより、そちらの赤ん坊を心配すべきだと思いますが？」
「？　アイちゃん？！」
「ふっ、ふわわー！」
ジョーカーに指摘されてハッとするエース。プリキュアの五人には耐えられた不快感も、過敏なアイちゃんは耐えられず、泣き叫んでしまった。
「上出来だ、ジョーカー。これで我々の力は増大する！」
アイちゃんが不快になったことで抑制されていたジャネジーが解放され、ベールは高笑いする。
「ジコチュー！　閃くオクー！　ホーリーソード！！」
当然ジコチューも強化され、再びプリキュアたちに襲いかかる。

「くぅっ！　さっきより威力が上がってるわ。でも、技が奪われないなら！　煌めきなさい！ トゥインクルダイヤモンド！！」
　攻撃を繰り返して弱らせるだけだと、ダイヤモンドはダイヤ状の氷塊をジコチューに放つ。
「カッチカチの、ロゼッタウォールオクー！」
　しかし、ジコチューの展開した障壁により防がれてしまう。
「厄介ね。ロゼッタウォールの防御力も、リフレクション並に強化されてるわ」
　これでは生半可な攻撃は通らないと、ソードは焦る。
「せめてこの空間をなんとかしなくては！　ときめきなさい！　エースショット！　ばきゅ～～ん！！」
　バッドエンド空間さえ閉じてしまえば、アイちゃんは泣き止む。それならば元凶であるジョーカーを倒すのが先決だと、エースは上空のジョーカーに紅の閃光を放つ。
「やりましたわ！……えっ！？」
　攻撃は命中したかに思えたが、爆発と共に無数のトランプが拡散し、ジョーカーの姿はいずこかへと消えていた。
「うふふ。残ね～～ん」
「後ろ！　あああっ！！」
　いつの間にかエースは背面を取られ、鋭利なトランプで背中を切り刻まれてしまう。
「エース！　今参ります！！」
　エースのピンチに、ロゼッタは急行しようとする。
「そう簡単には行かせんぞ！」
　だが、ロゼッタの前にはベールが立ちはだかり、足止めされてしまう。
「そこをどいてください！」
　ロゼッタはギッと睨み、得意の格闘術でベールに挑む。
「殴り合いか、面白い！　はぁっ！！」
　ベールは不敵な笑みを浮かべ、服を破きながら自らの筋力を増大させる。
「この間はしてやられたが、貴様一人程度ならっ！」
　十分打ち倒せると、ベールは意気揚々とロゼッタに

殴りかかるのだった。
「じっ、時間切れですわ……」
そんな中エースはタイムリミットが訪れ、変身が強制解除されてしまう。
「おやおや？　絶体絶命のピンチって奴ですねぇ。大人しく逃げ帰った方が身のためですよぉ」
もちろん見逃しませんけどねと、ジョーカーは意地悪い声で嘲笑う。
「ううん。絶対に逃げないよ！　あなたたちを倒して、まこぴーのサイン会を再開させなきゃいけないんだから！！」
まこぴーのファンたちに悲しい思いをさせないためにも退くわけにはいかないと、ハートは硬い意志を持った顔でジョーカーを睨み付ける。
「いいでしょう！　まずはあなたの心から折って差し上げましょう！！」
屈強な精神をボロボロに打ち砕くこそが至上の快楽だと言わんばかりに、ジョーカーは不気味な笑みを浮かべながらハートを強襲するのだった。

「なっ、なんやこれっ！？」
まこぴーのファンたちの避難を行っていたあかねは異変に気付く。逃げている最中、突然ファンの人々が膝を付き、ネガティブな言葉を呟き始めたのだった。
「この感じ、まさかっ！？」
周囲を見渡すと、いつの間にかバッドエンド空間に包まれていた。今度こそ正真正銘バッドエンド王国の仕業だと、やよいはあたふたする。
「どういうこと？　ピエーロは確かに倒したのに……」
まさか復活してしまったのかと、なおは不安気に呟く。
「このバッドエンド空間は。まさかとは思いますが……」
過去の戦闘経験から、バッドエンド空間は発生させる者によってパターンが異なるのを確認している。このバッドエンド空間はジョーカーによって作られたも

のだと、れいかは指摘する。
「ジョーカー……。言われてみれば、確かに」
オオカミさんたちの正体は、メルヘンランドの妖精だった。だから元の姿に戻った今、バッドエンド王国のために働くわけがない。そうなると思い当たるのはジョーカーくらいしかないと、みゆきは頷く。
「でも、ジョーカーはドロドロの絵の具になって、ピエーロに吸収されたやろ？」
「うん。だけど、わたしたちに倒されたわけじゃないんだよね」
だから、ピエーロに吸収されても自我が保たれていて、わたしたちの知らない間に分離したのかもと、やよいはあかねの疑問に答える。
「悩んだって仕方ないよ。ここは直球勝負で立ち向かうのみ！」
ああだこうだ考える暇があるのなら、現場に駆け付けて元凶を確かめた方が早いと、なおはみんなを急かす。
「なおの言う通りですね。恐らく、ジョーカーは新しいプリキュアの方々と戦っています」
実際に何度も直接対決した自分だからこそ、ジョーカーの脅威は十二分に理解している。初対決で倒せるほど甘い相手ではないと、れいかは真剣な顔で頷く。
「うん、行こうよ！　わたしたちスマイルプリキュアが、新しいプリキュアたちを助けるんだ!!」
そうしてみゆきは他の四人を先導して、ドキドキ！プリキュアの救援へと駆け付けるのだった。

「ソード！　ジコチューは私が相手するから、ハートの援護を！」
現状最優先すべきは、異空間を消滅させ、アイちゃんの機嫌を直すことによるエースの戦線復帰。ならば一刻も早くジョーカーを倒さなくてはならないと、ダイヤモンドは呼びかける。
「分かったわ！」
一人では大変だろうけど、ジョーカーを倒したら必ず戻るから。だからそれまで頼んだわよとダイヤモン

ドにエールを送りつつ、ソードはハートの救援へと向かう。

（さて、どうしようかしらね？）

数人掛かりでも苦戦した相手と、たった一人で対峙しなくてはならない。ありえない状況に変わりはないけど、みんなのためにここは持ち堪えなければと、ダイヤモンドは自らに気合を入れながらジコチューに立ち向かうのだった。

「やぁっ！　はぁっ！！」

その頃ロゼッタは、ベールとの格闘戦に挑んでいた。幼少の頃より格闘技に勤しんでいたロゼッタの動きには無駄がなく、次々と攻撃がヒットしていく。

「成程、成程。的確に相手の急所を狙い打つ、キレのある動き。なかなかの格闘術だ」

ベールはロゼッタの猛攻に感心しつつ、両腕で攻撃を受け止め続けていた。

「だがっ！」

ニヤリと笑い、ベールは腕を全力で左右に開く。

「きゃああー！？」

その勢いで、ロゼッタは後方に吹き飛ばされた。

「所詮はか弱い少女の一撃に過ぎん。その程度の軽い攻撃では、パワーアップした俺には傷一つ付けられんぞ」

「確かに体重差はどうしようもありません……」

ロゼッタはよろめきながら立ち上がる。普段でさえ身長差があり、体格差は歴然としている。その上でベールは筋力を増大させ、その身体はまるで鋼鉄の鎧のように硬い。自分の格闘術では限界があると。

「ですが、不利だからといって、退くわけにはいきません！」

あなたを倒して必ずハートの救援に駆け付けますわと、ロゼッタは拳を構えてベールとの戦いを再開するのだった。

「はああっ！　やあっ！！」

ハートは一人ジョーカーと戦っていたが、サラリと攻撃をかわされ、思うようにダメージを与えられずにいた。

「ほらほらぁ？　さっきまでの威勢はどうしました？

その程度の児戯で私に挑もうとは、滑稽の極みですねぇ～～」
ジョーカーはほくそ笑みつつ、ハートの心に揺さ振りをかける。
「負けない、あなたなんかに！」
戦っているみんな、そしてまこぴーファンたちのためにもあたしは絶対に挫けないと、ハートは心を強く持ち続けながら戦う。
「ハート！」
そんな中、ソードが救援へと駆け付けた。
「ソード、ありがとう！　二人でジョーカーを倒そっ！」
「ええ！」
ソードが来れば心強いとハートはニッコリと微笑み、二人で一緒にジョーカーへと立ち向かう。
「いいでしょう。そろそろ一人を相手するのにも飽きてきたところですし」
二人一辺に絶望へと押し込んだ方がより一層快感を得られると、ジョーカーは嘲笑う。
『プリキュア！　ダブルキック！！』
ハートとソードは揃って、ジョーカーへと強烈な蹴りを放とうとする。
「うふふ～～。無駄ですよぉ」
「えっ！？」
「そんなっ！　トランプで！？」
しかしその攻撃はトランプの束によって防がれ、二人は愕然とする。
「ほらほらほらほらー！」
そしてその束を一斉に二人へと投げ付ける。
「きゃあっ！？」
「あああっ！？」
二人はトランプの波状攻撃により、手痛いダメージを受けてしまう。
「くっ、ううっ。大丈夫？　ソード」
ハートは立ち上がりつつ、ソードの安否を訊ねる。
「なんとかね。それにしても、嫌な攻撃ね……」
ソードはハートに返事しつつ、ジョーカーに不快感を示す。

（トランプが攻撃手段だなんて、まるで私たちみたいじゃない！）

自分たちの姿や必殺技は、トランプの意匠が施されている。それはトランプ王国の伝説の戦士だからというのもある。

しかし、トランプ王国の者でないジョーカーが、王国の象徴であるトランプを攻撃手段に用いるのには、生理的嫌悪感を抱かずにはいられないと。

「ソード、あの人トランプ王国の人じゃないよね？」

「あるわけないでしょ！！」

ハートの素朴な疑問に、ソードは怒り心頭に否定する。

「ゴッ、ゴメン。でもさ、ジョーカーという名前といい、トランプの攻撃といい、何か引っ掛かるなって」

ハートは謝りつつ、自分が疑問に抱いたことを素直にぶつける。あたしたちの名前はそれぞれ、ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ、ソード、エース。みんなトランプに因むもの。

その中に、あらゆるトランプゲームにおいて重要な役割を持つ、切り札の異名を誇る存在。ジョーカーは含まれていない。

それはまるで、欠けていたあたしたちのピースにピッタリと当てはまるかのような存在だ。偶然にしてはあまりにでき過ぎてないと、ハートは疑問が尽きなかった。

「確かに色々気にはなるけど。今はそんなこと考えてる場合じゃないでしょ」

まずはあいつを倒すのが最優先。ジョーカーの正体を探るのは戦いが終わってからでもできると、ソードは釘を刺す。

「うん、そうだね！」

余計なことを考えないで戦闘に専念しなきゃと、ハートは両頬をパンと叩き、気合を入れて立ち上がる。

「おやおや？　懲りずにまだ立ち向かって来ますか。いい加減そろそろ絶望して欲しいところですけどねぇ」

そうすれば極上のバッドエナジーを回収できると、ジョーカーは二人を挑発する。

「絶望なんかしないよ！　みんなの笑顔のために、あたしは戦い続ける！」
圧倒的に不利な戦況にも関わらず、ハートは希望を見失わず、ニッコリと笑みを浮かべ、戦いを継続しようとする。
「！　その顔、腹が立ちますねぇ!!」
宿敵スマイルプリキュアの存在を思い起こさせると、ジョーカーは怒りの感情を露わにする。
「遊びはもう終わりです！　次で二人共々絶望の淵へと追い込んであげましょう!!」
そしてジョーカーはトドメを刺そうと、二人に強襲する。
「プリキュア！　ハッピーシャワー!!」
だが、そんな時だった。ジョーカーに向かい眩い光の粒子が放たれる。
「なっ!?　まさか、まさかっ!?」
咄嗟に攻撃を回避したものの、ジョーカーは激しく動揺する。
「大丈夫、新しいプリキュアのみんな？」
「えっ？　あなたたちは、もしかして？」
優しく呼びかける声に、ハートは訊ねる。あたしたちと違うプリキュアなのかと。
「うん！　キラキラ輝く、未来の光！　キュアハッピー!!」
ハートの質問に、ハッピーは名乗り口上を言いながら自己紹介する。
「太陽サンサン、熱血パワー！　キュアサニー!!」
「ピカピカぴかりん、じゃんけんポン！　キュアピース!!」
「勇気凛々、直球勝負！　キュアマーチ!!」
「深々と降り積もる、清き心……。キュアビューティ!!」
『五つの光が導く未来！　輝け！　スマイル・プリキュア!!』
続けて、サニー、ピース、マーチ、ビューティが名乗りを上げ、五人揃って決めポーズを取るのだった。
「スマイルプリキュア。それがあなたたちの名前なんだね」

「うん。そういうあなたたちは？」
「ドキドキ！プリキュア！　あたしはキュアハート。よろしくね、キュアハッピー！」
ハートは笑顔で自己紹介をして、ハッピーに握手を求める。
「うん！　ゴメンね。わたしたちが倒し切れなかったばかりに」
ハッピーは笑顔で握手を返しつつ、ジョーカーの復活で迷惑をかけてしまったと謝罪する。
「そんなことないよ。あなたたちが来てくれて心強い。二つのプリキュアの力を合わせれば、絶対に！」
この困難を乗り切れるよと、ハートは満開笑顔で答える。
「計算外ですね。まさかこれほど早く、スマイルプリキュアの連中が現れるとは……」
自分の復活を知れば、いずれ対峙することになるだろう。その前にドキドキ！プリキュアを潰す計画だったが、完全に覆されてしまったと。
「いいでしょう！　ならばまとめて片付けるのみ！！」

予定が多少狂っただけで最終目標は変わらないと、ジョーカーは動揺を隠せないまま、ハートとハッピーに襲いかかるのだった。

「だっ、大丈夫かな？」
ピースはオドオドとした声で、ソードに話しかける。
「ええ。私はキュアソード。よろしくね、キュアピース」
「キュアソード！？」
ソードに声をかけられた瞬間、ピースはドキッとする。
「どうかしたの？」
「ううん！　カッコいい名前だなって、つい見惚れちゃって」
「カッコイイ？」
「うん、そうだよ！　だってプリキュアって、可愛い名前のイメージじゃない？　なのにソードなんて、まるでスーパーヒーローみたいな名前なんだもん！！」

心に剣、輝く勇気って感じで燃える名前だよと、ピースは興奮しながら熱弁する。
「そっ、そう、ありがとう……」
プリキュアとしての名前をこうまで褒められたのは初めてで、ソードは戸惑いながら頬を赤く染める。
「苦戦してるようだね。加勢するよ」
マーチは疾風のように颯爽とダイヤモンドの元へと駆け付けた。
「助かるわ、キュアマーチ。私はキュアダイヤモンドよ」
ダイヤモンドは自己紹介をしつつ、ジコチューの特徴を話す。
「成程ねぇ。下手に攻撃しても、障壁で防がれるわけか」
「ええ、そう。それさえ破れればなんとかなるんだけど」
ロゼッタウォールの硬さは身を持って知っている。容易に突破できるものではないと、ダイヤモンドは語る。
「ふーん。ロゼッタウォールは、全方位に張れるわけ？」
「いいえ。基本的に前面にしか展開できないわ」
「そう。なら突破口はある！　わたしに任せて！！」
直球勝負で片付けてあげると、マーチは意気揚々と身構える。
「はああっ！　プリキュア！　マーチ……」
マーチはジャンプして、必殺技を放とうとする。
「ロゼッタウォールオクー！」
そんな攻撃は防いでみせると、ジコチューは早速障壁を展開する。
「シュート！！」
だが、マーチは無数の風の塊を発生させ、ジコチューの全方位を囲い込むように撃ち放つのだった。
「ジッ、ジコチュー？！」
さすがのジコチューも前方以外の攻撃は防ぎ切れず、マシンガンのようなマーチシュートを食らってしまう。
「今だよ、キュアダイヤモンド！！」
「ありがとう！　ラブハートアロー！　プリキュア！

ダイヤモンドシャワー！」
　マーチが活路を開いてくれたことに感謝しつつ、ダイヤモンドはラブハートアローから放たれる猛吹雪で、ジコチューを攻撃する。
「ラーブ、ラブ、ラーブ！」
　そうしてジコチューを見事に浄化するのだった。
「馬鹿な？　強化されたはずのジコチューが！？」
　新たなプリキュアが五人加わるだけでこうまで戦況が変わるのかと、ベールは狼狽する。
「おっと！　どこ見とんねん。おっちゃんの相手はうちや！」
　ベールが呆気に取られている隙を突き、サニーが参戦した。
「ぐっ！　俺はジコチューのようにはいかんぞ！！」
　貴様のような小娘一人増えたところで、やられはせん。軽く捻り潰してくれるわと、ベールはサニーに殴りかかる。
「おっと！　うちと力比べするん？　面白いやんけ」
「何っ！　俺の拳を受け止めただと！？」
　技術はともかく、力ではロゼッタを圧倒していた。にも関わらず、こいつは俺と張り合えるのかと、ベールは驚愕する。
「こう見えてもうち、力には自信あんねん。この程度で、うちは負かされへんで！」
「ぐぅぅ！」
　口で言うだけありなかなかの力だと、ベールは歯軋りしながら力尽くで拳を通そうとする。
「あんさん、今のうちや！」
　うちが抑えている間にこいつにトドメを刺すんやと、サニーはロゼッタに声をかける。
「はい。助けていただいて、どうもありがとうございます、キュアサニーさん。わたしはキュアロゼッタですわ」
　積もる話もありますが、まずはベールを倒すのが先決ですねと、ロゼッタはラブハートアローを取り出す。
「プリキュア！　ロゼッタリフレクション！！」
　ロゼッタはラブハートアローで弧を描きながら四葉のクローバー状の障壁を作り出し、更にはそれを二分

割してベールに殴りかかる。
「ぐおおっ！？」
障壁によりダメージを負うものの、筋力を増大させたベールは、なんとか耐え抜いていた。
「なかなかタフなおっちゃんやなぁ。なら、こいつも食らってみ！！」
サニーは後方にジャンプしながら身構えた。
「プリキュア！　サニーファイヤー！！」
そして火球を作り出し、力いっぱいベールにアタックするのだった。
「フンッ！　その程度のエネルギー弾、打ち返してみせるわ！　あたっ！　あーたたたたたたた！！」
ベールは目にも止まらん速さの拳で、サニーファイヤーを消そうとする。
「ほわちゃっ！　あちゃっ！？　あちゃちゃちゃちゃちゃ！！」
しかし、拡散した火球はベールの衣服に燃え移り、ベールは尻を抱えながら転げ回る。
「ホンマアホやなぁ、おっちゃん」
素直に避けておけばいいものを。粋がって受け止めようとするからそんな目に遭うんやと、サニーは苦笑する。
「にしても、これで残すはジョーカーのみやな！」
さっさと倒してバッドエンド空間を閉じなアカンなと、サニーは左手を右拳でパンと叩きながら気合を入れるのだった。

「お見事ですわ、スマイルプリキュアの皆さん。それに比べてわたくしは……」
変身が解除された後、なんとかアイちゃんを宥めようとするが、一向に機嫌が良くならず、再変身できないままだ。みんなが戦っている中自分は何もできなかったと、亜久里はションボリと片隅でアイちゃんを抱きながら座っていた。
「大丈夫ですか？　その様子ですと、あなたもプリキュアのようですが」
そんな亜久里を見かねたビューティが、優しく声を

かける。
「キュアビューティ。わたくしはとんだ役立たずですわ」
亜久里は気落ちした声で語る。自分は成長した姿で戦うスタイルを取っているが、制限時間は僅か五分。それ以上戦闘が長引いてしまえば、何もできない木偶の棒でしかないと。
「成程。あなたの事情はよく分かりました。ですが、そんなに落ち込むことはありません」
「気休めの言葉はいりませんわ」
「いいえ。気休めではありません。変身に制約がある。それは逆を言えば、あなたがまだ成長の途上にあるということです。立ち止まって引き返すのではなく、未来への道を歩んでいるが故の障害であるならば、なんら恥じることではありません」
「キュアビューティ……」
「ローマは一日にして成らず。千里の道も一歩からです。今は五分でも、六分、七分、十分と、徐々にあなたの望むプリキュアに近付いていけばいいだけです」
それがあなたの歩むべきプリキュアとしての道ですと、ビューティは亜久里を励ますのだった。
「キュアビューティ。あなたの素敵な言葉、わたくしのハートにしっかりと届きましたわ！」
自らの心臓に右手を当てながら、ゆっくりと立ち上がる亜久里。その顔にもう悩みはなかった。
「わたくしは円亜久里と申します。プリキュアとしての名は、キュアエースです」
そして胸元から離した手を、そのままビューティに向けるのだった。
「亜久里さんですね。今後ともよろしくお願いいたします」
ビューティはニッコリと微笑み、亜久里の手を優しく握った。
「こちらこそ。まさかわたくしがプリキュアとしての道を説かれる側になるとは、夢にも思いませんでしたわ」
今は戦えずとも、挫けずにみんなを見守ることはできる。亜久里はビューティに感謝の言葉を送りつつ、

強い意志を持ち直したのだった。
「多勢に無勢ですね。ここは……」
スマイルプリキュアに合流されてしまっては、容易に倒すことはできない。一時撤退が得策だと、ジョーカーは思い始めた。
「ジョーカー、退くぞ！」
そんな時、なんとか鎮火したベールが、情けない顔で撤退を言い出した。
「今ちょうど、私もそう思っていたところですよ」
ジョーカーはコクリと頷き、退散しようとする。
「待ちなさい、ジョーカー！」
ハッピーは追撃しようと、一人ジョーカーに立ち向かおうとする。
「それではアデュー、プリキュアのみなさん。次こそは必ず、絶望のドン底へと引きずり込んであげますよ！」
ジョーカーは捨て台詞を吐き、トランプを舞わせながらベールと共に姿を消すのだった。
「逃げられちゃったか。でもこれで」
ようやくまこぴーのサイン会を再開させられると、ハートはホッと胸を撫で下ろす。
「すごい、周りが元に戻っちゃった」
原理はよく分からないけど、これでまたサイン会ができるねと、ハッピーは心の底から喜ぶ。
「ありがとう、キュアハッピー。あなたたちが来てくれて、本当に助かったよ！」
ハートは感謝の言葉を込めて、ハッピーに握手を求めた。
「ううん。あなたたちの活躍がなかったら、被害がもっと大きくなっていたかもしれない。わたしの大好きなまこぴーのサイン会を守ってくれて、こちらこそ本当にありがとう」
お礼を言うのはこっちの方だよと、ハッピーはにこやかな笑顔で握手を返した。
「へぇ。あなたもまこぴーのファンなんだぁ」
あたしもだよと、ハートは目をキラキラと輝かせながら頷く。
「同じファン同士かぁ。じゃあさ」

同士だからというわけじゃないけど、今後のためにも一緒に変身を解こうよと、ハッピーは提案した。
「グッドアイディアだよ！　みんなはどう思う？」
ハートは即座に頷き、他の四人に同意を求める。
「そうね。確かに今後のことを考えると、お互いを知っていた方が良さそうね」
恐らく敵は、また共同戦線を張って来る。こちらも連携を行うためにはお互いの正体を知っておくのが前提だと、ダイヤモンドは頷く。
「賛成です。万が一正体が発覚するような事態になりましても、わたしたちの方で対処できますし、心配はいりませんわ」
秘密が外部に漏れることは絶対にないと、ロゼッタはニコニコしながら賛同する。
「分かったわ。あいつが何者であるかも知りたいし」
トランプを巧みに操るジョーカー。トランプ王国の者でないとは思いつつ、その正体がやはり気にかかる。ジョーカーと戦ってきたスマイルプリキュアのみんなら何か知っているかもしれないと、ソードは情報交換を理由に賛同する。
「わたくしは既に正体を晒しておりますし、異論はありませんわ」
寧ろ直接ビューティにプリキュアとしてのあるべき道を享受するのは願ったり叶ったりですわと、亜久里は率先して賛同の意を示した。
「こっちの方はオーケーだよ。そっちは？」
ハートはみんなからの賛同を得られたことを、ハッピーに伝えた。
「わたしたちの方もいいって。それじゃあ、いっせーのせーで……」
ハッピー側も問題なく、プリキュアたちは一斉に変身を解くこととなった。
「あっ！　あなたは幸せの王子さん！！」
解除後、開口一番に口を開いたのはみゆきだった。
「ひょっとして、さっきのやり取り見てた？」
自分を幸せの王子に例えるのは、六花の口癖だ。それを知っているということは、ファン同士の仲裁に入ったところを見てたんだねと、マナは訊ねる。

「うん。幸せの王子は、わたしにとって特別な思い入れのある絵本だから……。わたしは星空みゆき。よろしくね、幸せの王子さん！」
　みゆきは意味深に呟いた後、すぐさま笑顔になり、マナに自己紹介をした。
「あたしは相田マナ。マナでいいよ、星空みゆきちゃん」
「わたしもみゆきでいいよ、マナちゃん。あなたとこうしてお話することができて、ウルトラハッピー！」
　みゆきはマナの手を握りつつブンブンと振り回しながら、喜びを表すのだった。
「あたしも違うプリキュアの人とお話できて、ドッキドッキだよー！」
　マナもみゆきに合わせて振り回し、二人は早くも意気投合するのだった。
「やっ、やだっ！　さっきの、見られてたの？」
　いつもの癖でマナを幸せの王子に例えていたものの、いざ他人に見られると妙に恥ずかしくなり、六花は顔を真っ赤にして両頬に掌を当てながらあたふたする。
「アハハ。さっきの感じだと、マナって子の幼馴染みだったりする？」
　なおは笑いつつ、付き合いが長くないとあんなやり取りはできないと訊ねる。
「ええ、そうよ。分かる人には分かるみたいね。私は菱川六花。あなたは？」
「わたしは緑川なお。まっ、色々とよろしくね！」
「ええ。こちらこそ」
　六花となおは互いに自己紹介をして、握手を交わすのだった。
「ウェッ！？　ソッ、ソードの正体がケンジャキ！？」
　一方その頃、やよいはソードの正体を知り、呂律が回らないほどに興奮していた。
「確かに私の名前は剣崎真琴だけど、それがどうかした？」
　なんか苗字をヘンな発音をされたことが気になり、真琴は怪訝な顔で訊ねた。
「だってだって！　苗字が剣崎で、変身後の姿がソードで。意味はブレイドと同じ剣だし！！　アイドルがプ

リキュアって言うより、そっちの方がスゴイよ!!」
こうまで仮面ライダーブレイドを髣髴とさせる設定だなんてと、やよいのテンションは最初からクライマックスだ。
「そっ、その反応は新鮮ね。とにかくよろしくね」
てっきりアイドルであることに追及されるかと思っていたけど、まさか苗字の関連性ではしゃがれるとは夢にも思わず、真琴はキョトンとしながらやよいに手を差し伸べた。
「わたしは黄瀬やよい！　よろしくね、まこぴー!!」
やよいは興奮し切った顔で真琴の手を握り、自己紹介する。
「真琴でいいわよ。その言い方はマナだけで十分よ」
正直まこぴーと呼ばれるのは気恥ずかしいものがあると、真琴は頬を少し赤らめながら語る。
「わたしもやよいでいいよー。よろしくねー真琴ちゃん!!」
わたしがなんで真琴ちゃんの名前に反応したのかじっくりと説明するよと、やよいは終始ウキウキ気分だった。対する真琴は、若干戸惑いつつも面白そうな人だと、やよいへの興味が尽きないでいた。
「やよいは相変わらずやなぁ……」
やよいのやり取りを、あかねは肩の力が抜けた呆れ顔で見続けていた。
「あらあら。でも、なかなか愉快な方みたいですね」
ああいう顔をする真琴さんを見たのは初めてですわと、ありすは温かい眼差しを送るのだった。
「そう言ってもらえると、なんだか助かるわー。うちは日野あかねや。よろしゅうな」
あかねははにかみつつ、ありすへ自己紹介する。
「わたしは四葉ありすと申します。今後とも末永くお願いいたしますわ」
ありすは微笑しながらお辞儀をして、あかねへ自己紹介するのだった。
「私は青木れいかです。同じプリキュアの道を歩む者としてよろしくお願いいたします、亜久里さん」
「多くは語りませんわ。共にプリキュアの道を模索いたしましょう、れいかさん」

れいかと亜久里は言葉は少ないものの、しっかりと己の意思を疎通し合うのだった。
「一通り自己紹介を終えたみたいだけど、今後どうするかよね」
まだお互い出会ったばかりで、どんな相手か分からない状態だ。共同戦線を張る敵への対策もしなくちゃならないし、やらなきゃならないことは山積みだと六花は語る。
「ここはやっぱり、秘密基地で特訓だよね！」
違う勢力同士が一緒に鍛えるだなんてまるでスーパーヒーローみたいで素敵だよと、やよいは鼻息を荒くしながら力説する。
「確かに、模擬訓練みたいなのはしておいた方がいいと思うわね」
何せ、お互いどんな特性を持っているかさえ分からない。違うプリキュア同士で組みながらの戦闘を考慮しておく必要はありそうだと、真琴は真剣な眼差しでやよいの提案に賛同する。
「彼を知り己を知れば百戦危うからずという言葉もあります。戦いにおいては敵の情報を把握するのもさることながら、何よりお互いのことをよく知っていなければならないということです」
孫子の兵法を引用しつつ、れいかも賛同する。
「わたくしも賛成ですわ。問題はどこで行うかですわね」
プリキュアの正体を他に知られるわけにはいかない。人里離れた山奥とか場所は限定されるだろうと、亜久里は語る。
「その点はご心配に及びませんわ。四葉財閥傘下の温泉旅館がありますので」
そこなら貸し切りにして人目を気にせず特訓に打ち込めるだろうと、ありすはにこやかに説明する。
「温泉旅館を経営して貸し切りにできるやなんて、ありすはお金持ちなんやなぁ」
優れた格闘術を誇るプリキュアの姿からはとても想像付かないと、あかねは感心する。
「温泉かぁ。美味しい料理食べながらの特訓なんて、最高〜〜」

今から楽しみで仕方ないと、なおは涎を垂らしながら歓喜する。
「特訓と言うか合宿って感じになりそうだけど、悪くはないわね。マナはどう思う？」
六花は頷きつつ、マナへの同意を求める。
「モチのロンで、オッケーだよ！　スマイルプリキュアのみんなと合宿だなんて、ドキドキが止まらないよー！」
みんなと交流を深めながらの合宿は最高だと、マナは有無を言わずに賛同するのだった。
「わたしもドキドキ！プリキュアのみんなと合宿できて、ウルトラハッピー！！」
みゆきもノリノリで賛同の意を示すのだった。
「色々決めなきゃならないことはあるけど、まずは……」
ジコチューを追い払い、脅威は過ぎ去った。後はファンの人たちを呼び戻してサイン会を再開させなきゃねと、マナは率先して動き始めるのだった。
みんなもマナへと続き、真琴のサイン会は無事に再開したのだった。
サイン会が終了した後は、今後の日取りなどを決め、十人は来る合宿の日を楽しみにしながらそれぞれの街へと帰って行くのだった。

ジェスターは思いました。トランプを武器にするのもいい。だけど、自分がなりたいのはナイト。一人前の騎士ならやっぱり剣が使えるようになりたいと思ったのでした。

ですが、いざ鍛えてジョナサンと練習試合を行っても、圧倒的な体格差の前では勝つことができませんでした。

小柄な自分でも使える剣はないだろうか？　そう思って閃いたのが、斬るのではなく突く小型の剣でした。

これで自分はナイトになれるぞと、ジェスターは大喜びするのでした。

第二章・ワクワクの温泉合宿

「ったく、情けねぇ格好だな、ベール」
「粋がって出たつもりが、とんだ火遊びだったみたいねぇ」
アジトに帰り、尻を氷で冷やしたままソファーに寝転んでいるベールを、イーラとマーモは嘲笑した。
「やかましい！　スマイルプリキュアの連中さえ出て来なかったら！」
逆に俺たちが勝っていたはずだと、ベールは恨みつらみ話す。
「確かに、スマイルプリキュアは厄介です。このままドキドキ！プリキュアと手を組まれたら、より脅威となるのは明白でしょう」
故に、そうなる前に手を打っておかなければならないと、ジョーカーは部屋の片隅に立ちつつ指摘する。
「んなぁことは言われなくても分かってるっての！」
利害の一致でジョーカーと手を組んでいるとはいえ、ジコチューは基本的に単独行動を好む。だから、連携プレイをされたら勝ち目が無くなる自覚はあると、イーラは憤る。
「そう言うからには、何か対策があるのかしら？」
「ええ、もちろん」
マーモの質問にジョーカーはニヤリと笑い、三人の前に歩み出る。
「いいですか？　彼女等は、それぞれ五人になることで、より強さを発揮する。それが十人になれば、相乗効果で強大になることでしょう」
トランプの束を十枚出しながら、ジョーカーは対応策を説明し始める。
「プリキュア共の互いを支えようとする絆の強さは、確かなものです。だからこそ」
逆にそこを突くのですと、ジョーカーは不敵な笑みを浮かべる。
「どういう意味だ？」
ジョーカーの意図が分からず、イーラは首を傾げる。
「仮に異なるプリキュア同士が二人組になったところを襲撃した場合、彼女たちは協力して事に当たるでしょう。ですが」
知り合って間もない者同士が、五人の時のように足

並みが揃うはずがない。互いに互いの足を引っ張り合い、逆に戦力の低下を招くだろうと。二枚組になったトランプをレイピアで串刺しにしながら、ジョーカーは語る。

「成程ねぇ。親密になる前に先手を打つってことね」

「そういうことです。無論、多少のリスクもありますが」

こちらの予想より早く絆が強まった場合、作戦が失敗してしまう可能性があると、ジョーカーはマーモに説明する。

「ですが、その点はご心配に及びません。万が一の時の対策も練っておりますので」

ジョーカーは邪悪な笑みを浮かべ、秘策を話す。

「フハハハ！　なかなか手の込んだ策だな。俺は乗ったぜ」

すると、真っ先にベールが高笑いしながら賛同した。

「ヘッ、手の込んだこと考えやがるぜ」

「でも、そこまで万全を期せば、まずプリキュアを倒せるわね」

イーラとマーモも頷き、ジョーカーの提案は了承された。

「何々？　面白いことやろうとしてるじゃない？　アタシも混ぜてー！」

そんな時、四人の密談に興味を示したレジーナが姿を現した。

「これはこれはレジーナ様。私の作戦、是非ともご採用願いたいのですが」

レジーナがキングジコチューの娘だということもあり、ジョーカーは腰を低くして承認を得ようとする。

「いいわよ。マナにこれ以上好き勝手やられるのも癪だし」

ここで懲らしめておくのも悪くはないだろうと、レジーナは無邪気な笑顔を浮かべながら賛同するのだった。

「ありがとうございます。さあ、みなさんの力を合わせて、プリキュアの奴等を絶望の奈落へと引きずり込んであげましょう！」

そうしてプリキュア共から発せられたバッドエナジ

ーを基にピエーロ様を復活させるのですと、ジョーカーは大見得切って叫ぶのだった。

「わぁっ！　スゴーイ！！」
　数日後。待ちに待った合宿が催される温泉旅館へと辿り着くや否や、みゆきは歓喜の声を上げた。旅館は築五十年ほど経過している木造建築だった。最新のリゾートホテルのような荘厳さはないが、確かな歴史に裏付けされた、奥ゆかしさのある佇まいだった。
「この温泉旅館は、四葉財閥が戦前から運営している旅館ですわ」
　以前申し上げた通り今日は貸し切りですので存分にお楽しみくださいと、ありすはにこやかに答える。
「うーん。ご飯にするか温泉にするか、悩ましいなぁ」
　夕食にはちょうどいい頃合いだから、真っ先に食するのもいい。
　しかし、旅の疲れもあるし、ひとっ風呂浴びて疲労回復した後に食べるのも悪くはない。実に悩ましい問題だと、マナは真剣に悩む。
「ご飯にしようよ、ご飯～～。もうお腹ぺコペコで動けないよぉ」
　すると、真っ先になおが涙目で空腹を訴えた。
「そうね。温泉は後でゆっくりと入れるし。まずは夕食の方が良さそうね」
　六花の進言にみんなは賛同し、まずは夕食を取ることとなったのだった。
「わー！　広い広いー」
　旅館に入り案内された部屋は、十人が余裕で眠られる大広間だった。ますます合宿めいて来たことに、みゆきは子供のようにはしゃぐ。
「これだけ広いと、枕投げがはかどるね！」
　十人で行う枕投げは、さぞや大波乱で痛快だろうと、やよいはニヤニヤと笑う。
「この間やった時は確かに楽しかったけど、由来とかあるのかしら？」
　合宿の定番のようなものみたいなので、元となった逸話とかそういうのがあるのだろうかと、真琴は素朴

な疑問を投げかける。
「枕投げ。それは古代中国において、主君の寝込みを襲う事案が多発した。夜な夜な襲われては一たまりもないと、主の寝室の警備を厳重にするようになった。敵の方も警備を警戒して多人数の暗殺者を送るようになり、いつしか寝室が激戦地帯へと発展していった。そこから首を枕と暗喩して、匙を投げるをもじって、夜襲で就寝中の主君の首を取られることを、枕を投げるっていうようになったの。その故事を由来として、日本で修学旅行なんかでみんなでお泊りする時に遊ぶ競技として、枕投げが生み出されたんだよ！
（出典：民明書房刊『枕投げの由来と発展』）」
「スゴイわ。そんな歴史があったなんて……」
真剣な眼差しで薀蓄を垂れるやよいの熱弁に、真琴は感心しながらうんうんと頷いた。
「いやそれ、完全なデタラメやから」
真琴がトランプ王国の出身者であることを知っている上でからかっているだけだど、あかねがツッコむ。
「えっ？　そうなの！？」
やよいの説明があまりに迫真めいていたためつい信じてしまったと、真琴は顔を真っ赤にしながら恥ずかしがる。
「さて、お荷物も置いたことですし、みなさんでご夕食を作りましょう」
ありす曰く、プリキュアの正体が発覚しないようにするため、旅館のスタッフにもお暇を与えており、本当に自分たち以外の人がいないそうだ。
「えー！？　自炊しなきゃならないのー！？」
てっきり一流の割烹料理を食べられると思っていただけに、なおはガクッと肩の力を落とす。
「なお。今回の合宿の目的は、ドキドキ！プリキュアのみなさんと交流を深めることですよ」
みんなで一緒に夕食を作るのは、交流を深めるのにはもってこいのイベントだと、れいかはなおを諌める。
「さすがはれいかさん。言うことが違いますわ。そうと決まれば、早速取りかかりましょう」
亜久里はれいかの言に感心しつつ、率先して厨房へと向かうのだった。

「お嬢様。ご注文通り、あらゆる食材をご用意しておきました」
厨房に赴くと、食材を運び終えたことをセバスチャンが深くお辞儀をしながら伝えた。
「まあ。ありがとうございます、セバスチャン」
「ちょっと待てやー！　一般人おるんやないか！？」
さっき誰もいないと言うたばかりやと、あかねはセバスチャンの存在にツッコまざるを得なかった。
「セバスチャンは別ですわ」
ありすは、セバスチャンが一般人として様々な面でプリキュアを支援していることを、あかねに伝えた。
「へぇー。そりゃスゴイわなぁ」
自分たちプリキュアにもできないことはある。監視網を掌握することでプリキュアの情報を外部に漏らさないようにしたり、ヘリコプターで長距離移動を支援したりと、多岐に渡るセバスチャンの活躍の話に、あかねは舌を巻くしかなかった。
「手料理ね。腕がなるわ！」
料理番組収録の際、未体験であるが故に大恥をかいて以来、暇を見つけては料理の練習をしていた。修行の成果を見せる時だと、真琴は意気込む。
「ねーねー。やっぱり真琴ちゃんは手刀で切ったりするのかなー？」
名前がソードなだけに、手刀やら必殺技を駆使して料理するのかと、やよいはウキウキしながら訊ねた。
「しないわよ、そんなこと！」
真琴は即行で否定した。
「でもさー、まこぴーあたしの家でお料理番組の収録した時、まな板ごとベーコン切ったよね？」
「いっ、言わないでよ！」
何も過去の恥ずかしいエピソードをみんなの前で言うことないじゃないと、真琴は空気を読まないマナに顔を真っ赤にしながらプンスカ怒った。
「まな板ごと……カッコイイー！」
しかし、やよいにはクールな行動に映ったらしく、目をキラキラに輝かせながら、真琴への好感度をアップさせる。
「本当に変わった子ね、やよいは」

自分をからかったかと思えば、普段誰も見ていない部分をやたらと評価する。話に聞く男子小学生のような印象を受けると、真琴はやよいを評するのだった。

「手作りなのはいいけど、問題は何を作るかよね」

材料は豊富に揃っているようだけど、懐石料理とかは技量的にとても作れそうにないと、六花は思考を張り巡らせる。

「ここはやっぱりカレーだよね！」

みんなで作る合宿料理の定番だと、みゆきは挙手しながら提案する。

「あっ、ありえないわ。日本旅館でカレーだなんて……」

趣きや風情を丸っきり無視していると、六花はフラフラとよろめく。

「カレーかぁ。すきっ腹には最高なんだよねぇ」

そんな中、真っ先になおがエヘヘと涎を垂らしながら賛同する。

「いいですね。みなさんでワクワクと作るのには最適のお料理ですわ」

普段あまり口にしない点からも、是非とも作ってみたいと、ありすはニコニコと頷く。

「分かったわ。それじゃカレーでいいわよ、もう」

他のみんなも概ね賛成のようで、六花は溜息を吐きながらしぶしぶ了承するのだった。

こうしてプリキュアのみんなは、協力してカレーを作ることとなったのだった。

「えーと。お肉にジャガイモ、タマネギ、にんじん辺りは定番として。あとは何を入れるかな？」

どうせ作るなら、少し趣向を凝らしたカレーを作ってみたいと、マナは思案する。

「ここはやっぱり、ドカーッと豪勢なカツを乗せてだよねー」

ありきたりだけど、敵に勝つという願掛けの意味を込めたカツカレーがいいと、なおは提案する。

「うん、そうだね。それでいこー！」

マナに続いてみんなも賛同して、カツカレーを作る

こととなったのだった。
「カツカレーだとカロリーが多めだから、お野菜が欲しいところよね」
栄養のバランスを考えてと、六花は一人サラダを黙々と作り出した。
「あら、やよい？　どうしてタマネギを炒めているのかしら？」
タマネギはカレーの定番具材だという話は聞いているが、炒めるものだというのは初耳だと、真琴は訊ねる。
「おばあちゃんは言っていた！　『飴色に炒めたタマネギはルーにコクを与える』と」
唐突にやよいは人さし指で天を指し、ドヤ顔で力説した。
「へぇ。なかなか聡明なおばあ様を持っているのね」
「いや多分ソレ、なんかのネタやろうから」
感心する真琴に対し、さっきの冗談と同じで本気にせん方がええと、あかねはツッコミを入れる。
「ですが古来より、黄色を司る者はカレーに造詣が深いものと聞いていますわ」
ですからやよいさんがカレーに人一倍拘るのは理解できますわ。自分も同じプリキュアの黄色担当としてリスペクトしなければなりませんねと、ありすはニッコリと微笑む。
「分かる、分かるー！　やっぱりイエローと言えばカレーだよね！！」
ありすが自分の気持ちを代弁してくれたことに、やよいは目を輝かせながら上ずった声ではしゃぐ。
「言いたいことは分かるけど、別に古来からってわけじゃ。って、れいかさんの方は随分熱心に米を研いでるわね」
やよいとありすのやり取りに呆れつつ、六花はれいかが真剣な眼差しで米研ぎを行っているのが気になり、声をかける。
「六花さん。カレーはルーだけ丹念にこしらえば良いというものではありません。カレー〝ライス〟と言うように、ご飯も重要な要素です。画竜点睛を欠くということわざがあるように、どんなにルーが上出来だっ

たとしても、肝心のご飯が不味ければ、それは美味しいカレーと言うことはできません」
　ですから自分は考え得る最高のご飯の炊くのだと、れいかはカレーライスの道を説くのだった。
「お見事な言説ですわ。通常カレーを作る場合はルーばかりに気が向き、肝心要のライスには気が回らないものです」
　さすがはわたくしが一目置く方ですわと、亜久里はれいかを称賛しつつ、自分もお米を炊く手伝いを率先して行うのだった。
「みんながんばってるなー。うちもやったるで!!」
　それぞれが自分の担当する料理に力を入れてることに感化されたあかねは、気合を入れて料理に励むのだった。
「ちょっと待って！　そ、それは何？」
　あかねが明らかにカレーと異なる物を作っているのに気付き、六花は思わず声をあげる。
「何って、お好み焼きや。うちの自慢のお好み焼き、みんなに食わせてやるで！」
　日野家特性お好み焼きを披露してやるでと、あかねはやる気満々でお好み焼きの具材を調理する。
「あっ、ありえないわ……。カレーにお好み焼きは、いくらなんでも……」
　関西人はたこ焼きをおかずにしてご飯を食べると聞くが、カレーとお好み焼きは聞いたことのない組み合わせだと、六花は目まいを覚える気分だった。
「いいではないですか。本格的なお好み焼きと言うのも召し上がってみたいものですわ」
　ありすは相変わらずニコニコしながら、食卓が賑わうことを歓迎するのだった。
「お好み焼きかー。だったらあたしも、ぶたのしっぽ特性の……」
「お願いだから、それはやめてマナ」
　あかねに対抗しようとするマナを、六花はこれ以上メニューを増やさないでと、全力で止めに入った。六花がそこまで言うなら仕方ないと、マナは明日の朝食に作ることで妥協し、渋々作るのを諦めるのだった。
　こうしてお料理作りは賑やかに進行し、夕食会を迎

えるのだった。

「それじゃあ、いっただきまーす！」

大広間のテーブルに並べられた、十人分のカツカレーとサラダ、それにお好み焼き。みゆきは大袈裟な動作で手を合わせながら、食し始めるのだった。

「うーん！　ジューシーなカツとホカホカのご飯がたまんなーい！！」

こんなに美味しいカレーを食べられてウルトラハッピーと、みゆきは最大限の賛辞を送るのだった。

「そう言っていただけると、丹念にお米を炊いた甲斐がありましたわ」

ルーもさることながら、何よりご飯の美味しさが際立つ。れいかさんのお蔭で見事なカレーライスが出来上がりましたわと、亜久里はまるで料理評論家のような口振りで、カレーを褒め称える。

「うっ、お腹いっぱい。もう無理……」

カレーとサラダはなんとかなったものの、さすがにお好み焼きまで食う余力はないと、六花は早々にギブアップした。

「いらないの？　だったらいっただきまーす！」

六花に食欲がないと見るや否や、まるで獲物を狙うハイエナのようになおが颯爽とお好み焼きが添えられたお皿を取り、ペロリと平らげるのだった。

「あっ、ありえないわ。どんな胃袋しているのよ……」

なおは既に、自分のカレーやお好み焼きを食い終えた後だった。一体どうやればそんなに食べられるのだろうかと、六花は唖然とするしかなかった。

「ハフハフ、モグモグ。うおォン！　わたしはまるで人間火力発電所だー！！」

その頃やよいは、やたらとオーバーリアクションでカレーを食していた。

「みっ、見事なものね……」

流石はイエローと言えばカレーだと自負するだけあり、その食べっぷりも他の追従を許さない。

アイドルとして今後、料理を食べるアクションを要求される場面もあるだろう。その意味ではやよいのリアクションは参考になると、真琴はやよいをまじまじと見つつ食するのだった。

夕食会は終始賑やかに行われ、その後はいよいよお風呂タイムへと移行するのだった。

「うわーい！　ひろーい！！」

川岸に近く、周囲が山林に囲まれた風情ある露天風呂に、みゆきは歓喜の声をあげる。

「うーん。気持ちいいー。身体中があったかくなって、鼻歌を歌いたくなる気分だよ〜〜！」

頭にタオルを乗せながら、手足をゆったりと伸ばして湯に浸かるマナ。いい湯加減で気分が高揚し、ふんふんと鼻歌を歌おうとする。

「マナ、頼むから鼻歌に留めておいてね」

本格的に歌い出そうとすると、持ち前の音痴でせっかくの気分が台無しになってしまうと、六花は苦笑しながら忠告する。

「風呂を自然の中に違和感なく溶け込ませるとは。平たい顔族の風呂への拘りは、ローマ人以上だ……」

やよいは湯に浸からず、何やら悔しがるような顔で、ガックリと膝を付いていた。

「ローマ人って、やよいも日本人じゃなかったの？」

どう見ても日本人にしか見えないと、真琴はキョトンとする。

「多分それは、漫画か何かの台詞だと……って、いつもだとここであかねさんのツッコミが入りそうなんだけど」

やよいが意味不明な台詞を言う度にあかねがツッコむのが定例となっていたが、今回はない。そう言えば露天にも姿がない。一体どこで何をしているのだろうと、六花は首を傾げる。

「ああ。あかねなら、ありすちゃんとやりたいこと済ませてから来るって言ってたよ。あとれいかは、亜久里ちゃんにお茶に誘われたって」

なおはここに居ないメンバーの詳細をみんなに伝えた。

「はっぷっぷー。せっかくだから、みんなで入りたかったなー」

用があるなら仕方ないけど、人数が多い方がより楽

しかっただろうと、みゆきは残念がる。
「後の四人が来るまで浸かるのもいいけど、のぼせたら元も子もないわね」
長風呂にならないよう注意しなきゃねと思いつつ、六花は硬い表情で湯に浸かり続ける。
「んん～～。六花さん、ここが随分と張っておりますな～～？」
「ひゃっ！？」
そんな時、唐突にマナが六花の背後から忍び寄り、怪しい声を出しながら後ろから肩を揉むのだった。
「なっ、何するのよ、マナッ！？」
六花は甲高い悲鳴をあげながら、真っ赤な顔であたふたする。
「ゴメーン、六花。なんか肩に力入ってる感じがしたから。せっかくの温泉なんだし、リラックス、リラックスー」
そう言い、マナはまるでマッサージ師のように、六花の肩を揉み続けるのだった。
「だからやめなさいって、マナー！」
「あはは。いいね、その反応ー。れいかだとそうはいかないなー」
こっちが悪戯目的で肩を揉んだとしても、「なおは気が利くのね、ありがとう」とか感謝の言葉を向けられるのが関の山だと、なおはマナと六花のやり取りに羨望の眼差しを向ける。
「ん？　あかねちゃんたち、来たかなー？」
そんな時、ガラッと露天への扉が開く音がしたので、みゆきは立ち上がって出迎えようとする。
「六花ー。ボクも一緒に入りたいケルー」
「ギャー！？　おっ、男の人ー！？」
しかしその姿は見知らぬ少年だったので、みゆきは悲鳴をあげながら手前にあった風呂桶を咄嗟に拾って投げ付ける。
「ケッ、ケルー！？」
少年は直撃を食らい、特徴的な鳴き声をあげてバッタリと気絶してしまう。
「あっ、あれっ？　妖精さん」
倒れた瞬間ポフンと青色の妖精姿になり、みゆきは

キョトンとする。その正体は、人間に変身したラケルだった。
「ラッ、ラケル！？」
六花は急いで露天からあがり、気絶したラケルの元へと向かう。
「ごっ、ごめんなさい！　知らない男の人が入って来たからっ！」
衝動的に大変なことをしてしまったと、みゆきは謝罪する。
「謝る必要はないわ。勝手に入って来たラケルも悪いんだし」
私の方こそラケルたちが人間の姿になって、温泉に入ろうとすることを想定していなくてごめんと、六花みゆきを不問にするのだった。
「まあ、そのくらいの年の男の子なら、別に驚くほどのことでもないんけどねー」
弟たちと一緒に家のお風呂に入るのは珍しくないので、小学生以下の男子には免疫があると、なおは語る。
「そう言えば、みゆきちゃんたちにも妖精がいるんだよね？」
自分たちとは違い妖精の力で変身しないけど、パートナーとしての妖精はいると聞いた。その妖精さんは合宿に来なかったのと、マナは訊ねる。
「うん。キャンディは今、次期ロイヤルクイーン様になる勉強中で忙しいの」
本人も来たがっていたけど、女王としての責務を果たさければと兄のポップに諭され、泣く泣く取り止めたとみゆきは語る。
「確かメルヘンランドにいるのよね？　アン王女もご無事に到着されていればいいのだけれど」
ジョナサンのことだから心配はないだろうと思いつつ、真琴はアンジュへの想いを馳せるのだった。

「この度はメルヘンランドに快くお招きいただき感謝の言葉もありません、女王陛下」
その頃、鎧姿のジョナサンは眠りに就いているアンジュを引き連れ、メルヘンランドの王宮を訪れていた。

ドキドキ！プリキュア側の事情を聞いたポップが、アン王女を匿うならメルヘンランドの方がより安全だと助言をし、それを受けての行動だった。
「よく来たクルー。ゆっくりしていくクルー」
深々とお辞儀をするジョナサンに対して、玉座に座るキャンディが、軽快なノリで応えた。
「こら、キャンディ。曲がりなりにも相手は他国の王女の婚約者でござる。もっとシャキッと相手するでござる」
キャンディの横に立つポップが、もっとメルヘンランドの女王らしく振る舞えと苦言を呈する。
「特に、語尾にクルーはないでござる！」
「そんなこと言ったって、お兄ちゃんだってござるって言ってるクルー！」
人に注意する前に我が身を直せと、キャンディは手足をバタバタしながら訴える。
「ははっ。それにしても、メルヘンランドの復興振りは、目を見張るものがありますね」
バッドエンド王国の侵攻を受けたと聞くが、そういった爪痕を感じさせないのは素晴らしい。ジコチューを追い払った後のトランプ王国の再興にも希望が持てると、ジョナサンは絶賛する。
「そうでござる。メルヘンランドにもできたことが、トランプ王国にできないということはないでござる！」
スマイルプリキュアだけでなく拙者たちも全身全霊で協力を惜しまないと、ポップはジョナサンを励ます。
「そうウル！　アン王女は俺たちが護るから、安心するウル！！」
そんな時、ポップに呼応するように、ウルルン、オニニン、マジョリンの三匹が女王の間に姿を現した。
「ポップ殿。このお三方は？」
「ウルルン、オニニン、マジョリン。かつてバッドエンド三幹部だった妖精たちでござる」
ジョーカーにそそのかされバッドエンド王国の幹部として働かされていたが、プリキュアたちの活躍によって、元の姿に戻ることができたと。
「ははっ。それは心強い」

「ムッ！　その笑い方は何オニ！　小さくても、ちゃんと戦えるオニ！！」
「見かけだけで判断しないで欲しいマジョ！」
非力に見えても、アン王女を守るくらいの力はあると、オニニンたちは憤る。
「ごめんごめん。昔のことをふと思い出してね」
「どういうことウル？」
「アンにもね、君たちのような妖精がいたんだよ」
その子はジェスターと言って、元々は宮廷道化師の役目を持って生み出されたから、戦う力は持っていなかった。でも、努力の末僕とそれなりに張り合えるくらいに強くなったと、ジョナサンはしみじみと語る。
「彼のアンに対する愛情、そして護ろうとする心は、僕に引けを取らないものだった。だからこそ僕は、ジェスターにならアンを任せても大丈夫だと、安心して辺境警備へ赴くことができた」
荒廃した宮殿では、ジェスターの姿を探す余裕はなかった。無事でいてくれればいいのだけれどと、ジョナサンはジェスターの身を案じるのだった。

「うりゃっ！　おりゃっ！　行くでー！！」
「やっ！　はっ！　ええいっ！！」
みゆきたちが温泉で楽しんでいた頃、あかねとありすは温泉の広間で組み手を行っていた。
「ふぅ。こんなもんでええやろ。おおきにな、うちのワガママに付きおうてくれて」
組み手を終えると、あかねはそのまま畳に腰掛け、額に汗をかきながらありすに感謝の言葉を送った。
夕食後身体を動かしてからひとっ風呂浴びた方が気持ちいいだろうとあかねが言ったら、ありすが快く相手を引き受けてくれたのだった。
「いえいえ。わたしもあかねさんのお相手をできて楽しかったですわ」
久々に稽古を付けられて良かったと、ありすはニッコリと微笑む。
「うち、力はそこそこ自慢やけど、格闘技そのものはまったくの素人やん。ありすのような経験豊かなモン

に稽古付けてもらえると、めっちゃ助かるわ」
合宿中は今後もよろしゅう頼むでと、あかねはウィンクしながら親指を立てる。
「ええ。わたしでよろしければ、喜んでお相手いたしますわ」
ありすはニコニコしながら、あかねの頼みを聞き受けるのだった。
「おおきにな、ありす。にしても、ありすはホンマ、いっつもニコニコしてるなー」
「ええ。世界中の人々を笑顔にするのが、わたしの夢ですので」
ですから、まずは自分が笑顔でいなければ他の方々を笑顔にすることはできませんわと、常に笑顔でいるように心掛けていると、ありすは胸の内を語る。
「ええ夢やなー。みゆきが聞いたら喜ぶわ」
みんな笑顔でウルトラハッピー。スマイルプリキュアという名前には、そんなみゆきの思いが込められている。みんなが笑顔でいれば、それが幸せに繋がると。
「その通りですね。なんだかわたしたちは、出会うべくして出会った気がしますわ」
笑顔を冠するプリキュアと、人々を笑顔にするのを夢とする自分。その邂逅は偶然ではなく必然だと、ありすは満面の笑みで説く。
「だとええなー。ほな、そろそろ温泉に行こか？」
「ええ」
そうしてあかねとありすは親交を深めながら、二人仲良く露天風呂へと向かおうとするのだった。

「ありがたく頂戴いたしました」
お茶を飲み終えたれいかは、ゆっくりと茶碗を置き、深々と亜久里にお辞儀をする。二人は旅館内に簡易な茶室があると聞き、亜久里の誘いで茶に興じていたのだった。
「いかがでしたか？　わたくしの淹れたお茶は？」
是非ともれいかさんの感想を聞きたいですわと、亜久里は胸をドキドキさせながら訊ねる。
「なかなか洗練された味でした。一朝一夕では到底淹

れられないお茶。亜久里さん、あなたもまた、〝道〟を探求する者なのですね」
「お分かりいただけましたか？　さすがはれいかさんですわ」
　普通の人なら、既に極めた者だと称賛するだろう。
　しかしれいかは、まだ茶の道を極める途上にある者だと、正確に自分の腕を見抜いた。その慧眼振りには感服すると、亜久里はれいかを褒めちぎる。
「ですがその口振りですと、れいかさんも道を追い求める者なのですね」
　差し支えなければ、どのような道を歩んでいるのかお聞かせ願えないでしょうかと、亜久里は訊ねる。
「私は書道に弓道、それに生徒会長にプリキュアとしての道ですね」
　同時に多くの道を歩み続けており、一時は自分の歩むべき道を見失いかけたこともあると。
「ですが今は迷いを断ち切り、進むべき道をきちんと見定め、歩んでいる最中です」
　また道に迷うこともあるかもしれない。ですが、その時が来たとしても、己が信ずる道をまっすぐと歩み続けようと、れいかは信念を語るのだった。
「良いお言葉を聞きましたわ。可能ならば、このままれいかさんと互いの歩む道に関して理解を深め合いたいところですが、そうもいきません」
　合宿の目的は、互いの親交を深めることにある。しかし道の話を続けるのは互いの趣味の話でしかなく、共通の敵を倒すという本筋からは外れたものとなる。このまま会釈を続けるのは、それこそ道を踏み外す行為だと、亜久里は己を律するように語る。
「そうですね。それではまず、お互いの持っている情報の交換からいきましょう」
「分かりましたわ」
　そうして二人は今後の対策を練るため、情報交換を始めた。
「成程。ジョーカーの正体は、不明なのですね」
「ええ、そうです。他のバッドエンド三幹部の方々は、メルヘンランドの妖精でしたが、ジョーカーは最期闇の黒い絵の具と成り果てて、ピエーロに同化されてし

まいました」
一体何者であり、どういった目的でピエーロに仕えていたかも、結局分からず仕舞いだったと。
「無論、復活した理由も分からない。ますます不気味ですわね」
何故そんな得体の知れない存在とジコチューは手を組もうと思ったのか不思議でならないと、亜久里は指摘する。
「ええ。亜久里さんの話を聞く限り、ジコチューはその名が示すように、自己中心的な人々の集団」
そんな方々が善意でジョーカーに協力することなどありえない。ジコチュー側になんらかのメリットがあるからこそ同盟を結んだのだろうと、れいかは分析する。
「同感ですわ。ジコチュー側の目的が分かれば、もう少し動きやすいのですが」
「ジョーカーの目的は、十中八九ピエーロの復活です。となれば、ピエーロの復活がジコチュー側にとっても都合がいいということになると思います」
もっとも推測が付くのはそこまでで、具体的な目論見までは分からないと、れいかは語る。
「つまり、当面ジコチューはピエーロの復活に加担するだろう、ということですわね」
「ええ。どの規模で行うかは分かりませんが、大量のバッドエナジーの収集に動く可能性があります」
その点を注視して今後の対策を取らなければならないと、れいかは頷く。
「今まで以上に、敵の動向に警戒しなければならないということですわね。ありがとうございます、れいかさん。お蔭で有益な議論ができましたわ」
これで今後の見通しがある程度立ったと、亜久里は深々とお辞儀をした。
「それは私の方もです。……亜久里さん、不謹慎かもしれませんが、私はジョーカーの復活を嬉しく思っている面があります」
れいかはしばらくの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。
「どういうことですの？」

「私は、幾度となくジョーカーと直接戦いました。彼の恐ろしさは、誰よりも知っています。同時に、ジョーカーを救えなかったことに、少なからず後悔の念を抱いていました」

ジョーカーは正体不明の存在だ。でももし、バッドエンド三幹部のようにピエーロに操られているだけだったのだとしたら、今度こそ救ってあげたい。れいかは内なる想いを密かに告白するのだった。

「仇敵をも救済したいという、慈悲に溢れたお言葉。感動いたしましたわ」

その心を見習い、わたくしもジョーカーを倒すのではなく救う方向で戦いと、亜久里はにこやかにほほ笑むのだった。

「ふぅ。いい湯だったー。真琴ちゃん、これ飲んでみて！」

風呂上がりやよいは、真琴に自販機で販売していた瓶詰めのコーヒー牛乳を手渡した。

「これは何かしら？」

見慣れない飲み物に、真琴はきょとんとする。

「コーヒー牛乳っていって、お風呂上りに飲むのが定番なんだよ」

他にもフルーツ牛乳やラムネっていう手もあるけど、今日はこれにしてみたよって、やよいは説明する。

「へぇ。カフェオレとは違うのかしら？」

成分的には変わらない気がするんだけどと、真琴は瓶をまじまじと観察しながら訊ねる。

「カフェオレはコーヒーに牛乳を入れて飲む感じだけど、コーヒー牛乳は牛乳にコーヒーを混ぜて飲む感じかな？」

コーヒーが主体か牛乳が主体かで大分異なると、やよいは力説する。

「物は試しで、とにかく飲んでみて」

「分かったわ。って、あら？　これ、どうやって開けるのかしら？」

いざ飲もうとするが、紙の蓋がされた飲み物を手にするのは初めてで、真琴は四苦八苦する。

「その蓋を剥がせばいいんだよ」
「分かったわ。えいっ！　きゃあっ！?」
あまりに勢いよく蓋をひっぺ剥がしたため、真琴は思いっ切り顔にコーヒー牛乳をぶっかけてしまう。
「だっ、大丈夫！?　ティッシュ、ティッシュ！」
やよいはあたふたしながら、ポケットからティッシュを取り出して、真琴の顔を拭こうとする。
「いっ、いいわ！　それくらい自分でできるわ」
真琴はこっ恥ずかしい顔でティッシュを取り、顔に付着したコーヒー牛乳を拭き取るのだった。
「ごめんね。わたしが開ければ良かったかな?」
美味しい飲み物を知って欲しいという善意からの行動で迷惑をかけてしまったことに、やよいはか弱い声で謝罪する。
「構わないわ。こっちに来てから知らないことばかりだし」
何もかもがトランプ王国と異なり、初めて触れる物に戸惑う毎日だった。マナたちの前でも大分迷惑をかけてしまったけど、間違えながら覚えるんだと割り切ればいいんだと最近は思うようになったと、真琴は語る。
「それならいんだけど。あっ、代わりにわたしの飲んで」
「いいわ。まだ大分中身が残ってるし。それじゃ、いただくわ」
真琴はやよいの厚意を丁重に断り、自分のコーヒー牛乳を飲み始めた。
「んっ……美味しいわ。カフェオレを更に甘くした感じだけど、しっかりとコーヒーの味もして、意外と飲みやすいわ」
コーヒー独特の苦みが大分抑えられていて、自分としてはカフェオレより好みだと、真琴は評する。
「良かったぁ。それでね、コーヒー牛乳は、こうやって飲むものなんだよ」
やよいは手本を見せるように、左手を腰に当てながら、ググッとコーヒー牛乳を飲み干した。
「こうね。分かったわ」
真琴は見よう見真似で、コーヒー牛乳を飲み終えた

のだった。
「ごちそうさま。なかなかいい体験だったわ」
美味しい飲み物を教えてくれてありがとうと、真琴は感謝の言葉をやよいに送る。
「どういたしましてー。ねえねえ、真琴ちゃん。トランプ王国ってどんな所なのかな？」
この機会に聞いてみようと、やよいは興味本位な声で訊ねる。
「そうね。平和で豊かな所だったわ。ジコチューの侵略を受けるまではね」
自分にとっては、大切な故郷。だからこそ一刻も早く復興させたいと、真琴は力強い言葉で語る。
「亡国のプリキュア！　うーん、やっぱりカッコイイなぁ」
真琴ちゃんそのものもだけど、置かれた境遇もスーパーヒーローみたいでグッドだと、やよいはキラキラとした目で真琴を見つめる。
「本当に変わった子ね、やよいは。普通の女の子は、そういう風には思わないものよ」
可愛い物ではなく、ひたすらカッコイイ物を追い求めるやよいの姿勢は風変りだと、真琴は指摘する。
「うん！　わたし、スーパーヒーローみたいに強くてカッコいいものが大好きで、そんなプリキュアになりたいって、ずっと思ってるの」
「成程ね。少しだけ気持ち分かるわ」
カッコ良くなりたいなどとは思っていないけど、強さへの憧れはよく理解できる。あの時自分がもっと強ければ、トランプ王国もアン王女も護れたはずだと。
「だから、この合宿は好機ね。自分自身を磨き上げるための」
「うん、そうだよ！　合宿を通して、二人で一緒にパワーアップしよ！」
目的は違えど、強さを求める仲間。さながら少年漫画のライバル同士のように、真琴ちゃんと切磋琢磨してより高いステップへ上がりたいと、やよいは展望を語る。
「ええ。明日からよろしくね、やよい！」
遠慮はしないでビシバシ行くわよと、真琴は力強い

笑顔で語る。そうして二人は、明日からの修行の日々に思いを寄せるのだった。

「ほらほら、アイちゃーん！　いないいないばぁ!!」
「アイ！　アイ！」
一足早く六花と共に部屋へと戻ったなおは、アイちゃんの子守りをしていた。
「助かるわ。シャルルたちも相手するの疲れたみたいだし」
自分たちが露天に行っている間、アイちゃんの面倒は妖精たちが見ていたのだが。自由奔放なアイちゃんに振り回され、疲弊していたのだった。あまりの大変さに、ラケルも逃げ惑うように露天に来たんでしょうねと、六花は苦笑する。
「それじゃあ、シャルルたちはマナたちの所に戻るシャル」
「ええ。どうもありがとう」
六花がお礼の言葉を述べると、シャルル、ランス、ダビィはそれぞれマナ、ありす、真琴の元へと戻って行った。
「それにしても、手馴れているわね。こんなにアイちゃんが懐くだなんて」
自分でさえ、アイちゃんの子守りには四苦八苦した。にも関わらず、熟練の保母さんのように、あっという間にアイちゃんをあやしたのは驚嘆に値すると。
「そりゃあお母ちゃんが忙しい時、弟や妹たちの面倒を見てたからね」
赤ちゃんの相手は小さい頃から絶え間なくやっているようなものだと、なおは語る。
「そう言えば、兄弟は全部で何人いるのかしら？」
弟や妹たちと言っているくらいだから数人いるのではないかと、六花は訊ねる。
「けいた、はる、ひな、ゆうた、こうたに、この間産まれたばかりのゆい。弟と妹が三人の、全部で六人かな」
「ろっ、六人!?　随分な大家族ね……」
それだけ多いと面倒を見るのも大変なのではないか

と、六花は苦笑しながら訊ねる。
「まあね。時々言うこと聞かなくて暴れ回ることもあるし、兄弟で取り合いをして収拾が付かなくなることもあるし」
「あはは……」
一人二人でも大変なのに、それが六人にもなるとさぞや苦労するだろうなと、六花は苦笑する。
「でもさ。苦労が多い分、幸せが増すって言うかさ。それだけ多くの兄弟に囲まれていると、毎日が楽しくて飽きないよ」
だからわたしはこれからも大変でも絶対に根をあげないよと、なおは腕まくりしながらアピールする。
「大したものね。私の将来の夢は小児科医なんだけどね。アイちゃんの子守りをするようになるまで、子供の面倒を見たことがなかったのよ」
医者になるための勉強は重ねてきた。でも、実際に子供と触れ合った時間はあまりに少ない。そういった実務経験では決してなおには敵わないと、六花は感心する。
「小児科医かぁ。そりゃ、スゴイよ。お母ちゃんが忙しい時、具合悪くなった弟や妹たちをよく病院に連れて行くんだけどさ。自分の悪いところがよく分からない子供の病状をピタリと当てるのはスゴイなって、いつも思うよ」
小児科医は、なんだかんだでが一番お世話になっているお医者さんだ。そんな敬愛して止まない小児科医を目指しているのは本当に尊敬するよと、なおは六花を褒め称える。
「私なんか大したことないわよ。マナの方がよっぽどスゴイわ」
六花は謙遜しながら語る。マナの生徒会長としての働き振りを。
「へぇ。その気持ち分かるなぁ。れいかも生徒会長だし」
六花と同じく生徒会長な幼馴染みの奮闘振りを間近で見ている身としては痛いほど共感できると、なおは頷く。
「でもさ、それでもやっぱり六花はスゴイと思うな」

「どうして？」
「だってさ、六花は生徒会書記なんでしょ。親友をサポートする役職に就いてるなんて、大したもんだよ」
勉強が苦手な自分には、到底真似できない。れいかのサポートをしようと思っても、かえって足を引っ張る羽目になるのには目に見えていると。
「だからさ、自分にできないことをやってのける六花が羨ましくもあるし、尊敬できるよ」
「羨ましいか。ふふっ。なんだか私たち、お互いを褒め称えてばかり」
どっちも自分を謙遜しては、相手がいかに優れているかを言い合っている。私たち似た者同士よねと、六花は微笑する。
「そうだねー。変に気が合うっていうか。六花とはいい友達になれそう」
「同感ね。今後とも改めてよろしくね、なお」
「うん！　こっちこそ、六花」
そうして二人はまた手を取り合った。互いに尊敬できる間柄になり、六花となおの友情は深まるのだった。

「うーん。どこ行ったのかなぁ、みゆきちゃん」
温泉から上がって着替えをしているところまでは一緒だったんだけど、いつの間にか姿を消してしまった。もっと色々とお話したいなと、マナはみゆきの姿を探す。
「マナちゃん、こっち、こっちー！」
そんな時、マナは当の本人から声をかけられた。
「みゆきちゃん！　今行くよー」
マナはウキウキしながら、みゆきの元へと向かう。そこは旅館内に設けられた、日本庭園だった。
「お待たせー。なんか用があったのかな？」
わざわざ自分を手招いたくらいだからと、マナは訊ねる。
「うん！　ほら、見て見てー！」
みゆきは上空を指差し、マナは指の先端に目を向ける。
「うわぁー、スゴイお星さまー。ドッキドキだよー！！」

そこには満天の星空が広がっており、マナは自ずと胸の鼓動が高鳴った。

「みゆきちゃん、これをあたしに見せてたかったの？」

「うん。わたしの名前は星空みゆきだから。お星さまが綺麗な所で、マナちゃんとお話したかったんだ」

そう言うと、みゆきは胸に手を当てながら、すぅっと大きく息を吸った。

「ねえ、マナちゃんは六花ちゃんに幸せの王子って呼ばれてるんだよね？」

「ああ、まこぴーのサイン会の時だよね。六花ったら、いっつもあたしのこと幸せの王子って言うんだよねー」

自分は全然幸せの王子じゃないのにねと、マナは軽快に応える。

「それでね、わたし小さい頃からずっと心の奥に引っ掛かっていたことがあるの。マナちゃんなら、わたしの疑問に答えてくれるんじゃないかって思って」

ある意味覚悟を決めてここに呼び出したと、みゆきは告白する。

「あたしでいいなら、なんでも答えてあげるよー」

それでみゆきちゃんの胸の楔が解けるなら、あたしはどんな協力も惜しまないと、マナは包容力のある声で答えるのだった。

「ありがとう。あのね、幸せの王子は、本当に幸せだったのかなって」

「幸せの王子様が？」

わざわざ幸せだって言ってるくらいだからそうだったんじゃないと、マナは首を傾げる。

「うん。確かに最後は神様に魂を救われて、ツバメさんと一緒に天国で幸せに暮らすって物語が終わっている。その結末自体は幸福だって言えるかもしれない。でも……」

煌びやかな身体がドンドンみすぼらしくなっていき、最期は町の人々に見捨てられて、身体が溶かされてしまった。

「王子様は貧しい人たちのために自分の身を捧げたはずなのに。誰にも感謝されずに、無残な最期を遂げて。王子様が可哀想過ぎて、小さい頃絵本を読んでは何度

も何度も泣いちゃった。その度に思ったんだ。幸せの王子様は全然幸せに見えない、寧ろ不幸なんじゃないかって」

幸せの王子というタイトルは皮肉で、実際は不幸だ。物語も無理くりハッピーエンドにしただけで、実際はバッドエンドなんじゃないかと。

「ねえ？　マナちゃんは本当に幸せだったと思う？」

普段から幸せの王子と呼ばれているマナちゃんならこの長年に疑問に答えてくれるはずだと、みゆきはすがるように問い続ける。

「うーん。確かに読んでる人の立場からすれば、不幸かもしれないね。みゆきちゃんの感想は、間違ってないよ」

自分自身、他の人から見れば色んなことに首を突っ込んでいて大変そうだと見られている自覚はあると、マナは正直に答える。

「そう……」

「でもね、やっぱり王子様は幸せだったと思うよ」

「どうして？」

「だってさ、王子様が身体の宝石を配ったのは、自分の身を犠牲にしてまで救いたい人がいたからでしょ？王子様にとっての不幸は、貧しい人たちが救われないことなんじゃないかな」

確か物語の冒頭で、貧しい人たちに涙を流していたよね。それは自分にとって幸福じゃない状態だからこそ零れ落ちた涙なんじゃないかってと、マナは指摘する。

「だからさ、自分の宝石のお蔭で人々が貧乏じゃなくなることが、王子様にとっての幸せだと思うんだ」

「あっ！」

みゆきはハッとした。思えば自分は読み手の視点で王子様が不幸だと思っていただけで、王子様の気持ちになって絵本を読んだことがないんだと気付かされた。

「でも、宝石も金箔も無くなってもまだ貧しくて救えない人がいたとしたら、それは不幸かもしれないね」

敢えて不幸な要素を挙げるならそれくらいしかないだろうと、マナは指摘する。

「うん、そうだね。ありがとう、マナちゃん。マナち

やんのお蔭で、胸のつっかえが取れた気がするよ！」
　みんな笑顔でウルトラハッピー。それがわたしの願い。王子様のお蔭でみんなが笑顔になるなら、それは幸福だと言えるとみゆきは悟ったのだった。
「胸のドキドキ、取り戻してくれた？」
「うん！　わたし、マナちゃんと出会えて、本当にウルトラハッピーだよ！！」
　みゆきはマナの手をギュッと握って、最大限に感謝するのだった。
「どういたしましてー」
「でもさ、そこまで王子様の気持ちを分かってて、どうして自分は幸せの王子じゃないと思ってるのかな？」
　疑問に答えてくれたのは嬉しいけど、自信を幸せの王子に重ね合わせないことを不思議に思い、みゆきは改めて訊ねる。
「それはね。王子様は像で、自分で動くことができなかった。だからツバメさんの力を借りなければならなかった。それでツバメさんは渡れなくなって、寒さで死んじゃった」
　王子様に仕えることができてツバメは幸せだったって言いながら事切れたんだけど、自分の願いのためにツバメさんが亡くなっちゃったことは、王子様にとってすごく悲しいことだと。
「でもさ、あたしはこうして自分の足で歩くことができる。ツバメさんがいなくても、人々を幸せにさせることができるんだって！」
　前に六花にあなたのツバメになれないかって言われたことがある。その言葉自体は嬉しいけど、やっぱり親友が自分のために苦労しちゃうのは耐えられないなって、マナは語る。
「スゴイね、マナちゃんは。どこまでも愛に溢れている」
　みなぎる愛で、人々を幸福にする存在。それがマナちゃんなんだって、みゆきは心から尊敬した。そして願いが叶うなら、自分もまたマナのような人間になりたいと、みゆきは強く思うのだった。
「みゆきちゃん。あたしね、救いたい子がいるんだ」

「救いたい人？　それってつまり」
マナちゃんがある意味不幸な状態だよねと、みゆきは訊ねる。
「うん。レジーナって言ってね。キングジコチューの娘」
マナはゆっくりとした口で語り始める。最初はぶつかり合ったこともあったけど、交流を深めていくうちに親密になり、友達になったと。
「でもね、この間再会した時は、なんだか人が変わちゃったみたいで」
あたしの言葉は届かなかった。でもそれは、レジーナがあたしを忘れたわけじゃなく、きっとキングジコチューに何かされたんだと。
「だからね。あたしはレジーナを解放してあげたい。そしてまた仲良くなりたいなって」
それが今のあたしが一番求めてる幸福かなって、マナは星空に願いを託すように祈るのだった。
「大丈夫だよ！　絶対に元に戻るよ!!」
みゆきはマナを力強く励ます。自分たちと戦っていたバッドエンド幹部の人たちも、元の妖精さんに戻すことができた。だから、レジーナちゃんも絶対に戻せるって。
「ありがとう。あたしも絶対戻せるって信じてる！」
だから、レジーナを取り戻せる強さを身に付けるためにも、明日からの特訓をがんばらなきゃねと、マナは意気込むのだった。
「わたしも協力するよ！　マナちゃんをウルトラハッピーにするために!!」
ツバメとしてではなく、もう一人の幸せの王子として自分にできることをする。みゆきはそう、マナに誓うのだった。
「相変わらず癪に障る子ね、マナは」
「えっ？　この声は」
そんな時だった。上空から可愛らしい高飛車な声が響いて来て、マナはハッとして見上げた。
「はぁい。こんばんは、マナ」
「レジーナ！　どうしてここに？」
突然レジーナが現れたことに、マナは驚きを隠せな

かった。
「レジーナ。この子が」
マナちゃんが救いたい人なんだと、みゆきはレジーナの顔をジッと見つめる。
「へぇ。見慣れない顔だけど、アンタが噂のスマイルプリキュアね。ちょうど良かったわ」
レジーナは無邪気な笑みを浮かべると、唐突に禍々しい闇の黒い絵本を取り出した。
「レジーナ、なんなのそれは……？」
見るからに怪しい物体に、マナは冷や汗をかきながら訊ねた。
「これね？　ジョーカーとベールが合作した、特注の闇の黒い絵本よ。なんでもアンタたちを、素敵なジコチューでバッドエンドな絵本の世界へと連れてってくれるそうよ」
一度入ったら簡単には出られないそうだから、これでさよならねと言い、レジーナはマナたちを絵本に吸い込もうとする。
「レジーナ！　お願い、話を聞いて！」
なんとかレジーナを正気に返らそうと、マナは必死で呼びかける。
「うるさい！　もうマナの声なんか聞きたくもない！消えちゃえ！」
レジーナは憤怒の表情に豹変し、闇の黒い絵本のページをめくる。
「マナちゃん、逃げて！」
「……！」
みゆきは叫びながらマナに逃避を促そうとする。しかし、マナは一歩も動こうとしなかった。
「マナちゃん？　きゃああー！？」
その一瞬が仇となり、マナとみゆきは闇の黒い絵本に吸収されるのだった。

「六花、急ぐケル！　こっちからジコチューの気配がするケル！」
その頃、六花たちは急いでジコチューが出現した現場へ向かおうとしていた。

「分かってる！　アイちゃんは亜久里のところに急いで！」
　亜久里はアイちゃんの力がなくては変身できない。自分たちが敵を引き付けている間に向かって欲しいと呼びかける。
「アイ！　アイ！」
　アイちゃんはパタパタと飛びながら、亜久里の元へと駆け付ける。
「いよっ！　久し振りだな、キュアダイヤモンド！」
　それから間もなくして、六花たちの前にイーラが姿を現した。
「イーラ！」
「六花、ひょっとしてコイツが？」
「ええ。ジコチューよ！」
　六花はなおに頷きつつ、こっちが連携を強める前に襲って来るなんてなかなか味な真似をするのねと、ギッとイーラを睨み付ける。
「どうやらそっちの女がスマイルプリキュアみたいだな！　グッドタイミングだぜ！！」
　イーラはニヤリと笑い、間髪入れず闇の黒い絵本を展開する。
「何これ！？　きゃあっ！？」
　不意を突かれ、六花となおもまた、闇の黒い絵本へと吸い込まれていくのだった。

「こっちでランス～～」
「ったく、なんつータイミングで襲って来るんや！」
　これから温泉で汗を流そうと思っていただけに、あかねはえらく不機嫌だった。
「まあまあ、いいではないですか。ウォーミングアップをしたと思えば」
　逆に絶好のタイミングだと、ありすは穏やかな表情で答える。
「まったく。そのポジティブな発想は、ホンマ見習いたいものや」
　あかねは感心しつつ、そういうことなら本気でいかせてもらわねばならんなと、気合を入れるのだった。

「数日振りだな、キュアサニーにロゼッタ」
そんな二人の前に、ベールが姿を現した。
「久し振りやなぁ、おっちゃん。尻の火傷はもう癒えたんか？」
突然のベールの来襲に、あかねは挑発しながら対峙しようとする。
「お蔭でな。あの時の借りは返させてもらうぞ！」
「ええで！　また返り討ちにしたるで！！」
売り言葉に買い言葉。あかねは指をポキポキと鳴らしながら臨戦態勢に入ろうとする。
「フンッ！　今日は直接殴り合うつもりはない！！」
ベールはすかさず闇の黒い絵本のページをめくる。
「なっ、なんやこれ？　うわー？！」
あかねとありすは避ける間もなく、闇の黒い絵本に飲み込まれていく。
「俺とジョーカーのとっておきだ。せいぜい楽しめよ、プリキュア共」
ベールはニヤリと笑いながら闇の黒い絵本を持ち、踵を返すのだった。

「まったく、せっかくいい気分になれたって言うのに！」
あかねたちとは対照的に、風呂上がりの一杯を飲んでこれからゆっくりくつろごうとしていた時を強襲されて、真琴は気分を害していた。
「さながら大気圏突入前を狙う感じで、敵ながら分かってるなぁ」
相手が油断している隙を襲うのは定石だと、やよいはウンウンと頷く。
「はぁい。久し振りね、キュアソード」
そんな二人の前に、マーモが軽快な声で出現した。
「マーモ！」
「あらぁ。その様子だと、お風呂上がりみたいねぇ」
相手が嫌がるタイミングで襲えて良かったと、マーモは高笑いする。
「行くわよ、やよい！」
「うん！　倒した後、また温泉で汗を洗い流そっ！！」

真琴とやよいは呼応して、マーモと戦おうとする。
「うふふ。焦らない、焦らない。そんなんじゃ、お肌が荒れちゃうわよ？」
「うるさい！」
誰のせいでこんなことになってるのよと、真琴の怒りのボルテージは上昇する。
「ごめんなさぁい。お詫びに、とっておきのプレゼントあげちゃうわ」
マーモは平謝りして、闇の黒い絵本を展開する。
「何っ！？　きゃあっ！？」
真琴とやよいは回避する間もなく、闇の黒い絵本に包み込まれるのだった。

「アイ！　アイ！」
「亜久里さん、あれ！」
部屋に戻ろうとしていたれいかと亜久里の前に、アイちゃんがパタパタと飛んで来た。
「アイちゃんが一人で来るなんて。一大事ですわ！」

アイちゃんはシャルルたちが面倒を見ていたはず。それがこうして一人で自分のところに来るということは何かあったのだろうと、亜久里は警戒心を強める。
「おやおや。キュアビューティに、エース。お二人一緒ですか」
そんな二人の前に、ジョーカーが突然現れた。
「ジョーカー！」
「スマイルプリキュアきっての頭脳派であるビューティに、ドキドキ！プリキュアでも特に戦闘力に秀でたエース。例え他が失敗したとしても、あなた方二人を始末できれば、戦力ダウンは確実です！」
実に好都合ですと、ジョーカーは声を上げるれいかに不敵な笑みで返した。
「ジョーカー。あなたはただ利用されているだけです！」
ジコチューにいいように扱われ、利用価値が無くなったら捨てられるだけだと、れいかは説得を試みようとする。
「ええ。そんなことは百も承知ですよ」

ピエーロ様を復活させるのに選択の余地などない。例えこの身がボロボロに朽ち果てたとしても、ピエーロ様さえ復活されればそれでいいと、ジョーカーは己の覚悟を語る。

「分からないです。どうしてあなたみたいな……」

まっすぐで純粋な忠義の心を持つ者がピエーロなんかのために身を挺して働いているのだと、れいかは悲痛な顔をする。

「ジョーカー！　ジコチューと手を組むのはおよしなさい！！」

それはあなたをより不幸にする道でしかないと、亜久里は叱責する。

「！？」

その声に、ジョーカーは僅かながら反応した。

「御託はこれまでです！　あなたがたをジコチューでバッドエンドな絵本の世界へといざないましょう！」

しかしジョーカーはすぐに気を持ち直し、闇の黒い絵本を開き始める。

「ジョーカー……」

自分の言葉が通じなかったことに、れいかは失望する。

「れいかさん……。ジョーカー、それがわたくしたちに課す試練だというのなら、甘んじて受けます！」

そして必ずや乗り越えあなたを説得してみせると、亜久里はジョーカーに鋭い視線を送りながら、れいかと共に闇の黒い絵本に収納されるのだった。

「戯言を。しかし……」

一瞬とはいえ、亜久里の顔を直視して胸がドキッとしてしまった。

彼女と出会ったのは、この間が初めてのはず。なのに何故、酷く懐かしい感じがするのだと、ジョーカーは胸の内から湧き上がる感情に困惑する。

「！？　バカな……！？　この私が？！」

ポタリポタリと頬を濡らす違和感に、ジョーカーは気が動転した。いつの間にか涙を流していたからだ。

「ありえません！　この私が涙などと！！」

それはバッドエンドを望む自分には最も似つかわしくない、屈辱たるもの。ピエーロ様のためにも泣いた

ことはないというのにと、ジョーカーは己の流した涙に怒りを覚える。
「この恥辱は決して忘れませんよ、キュアエース!!」
あなたには最大級の絶望を与えましょうと、ジョーカーは亜久里への敵愾心を燃えたぎらせるのだった。

「みゆきちゃん、大丈夫?」
「んっ、んん……」
みゆきはマナに呼びかけられ、ゆっくりと目を覚ました。
「マナちゃん。わたしはどうにか……」
みゆきはマナの呼びかけに応じると共に、どうしてあの時レジーナの攻撃を避けなかったのか訊ねた。
「うん。あそこで逃げたら、レジーナのこと救えないなと思って」
レジーナのやることすべてを受け入れて、その上で乗り越えなきゃ説得なんて絶対に無理だと、マナは静かな声で答える。

「ゴメンね、なんだか巻き込んじゃったみたいで」
「ううん。そんなことないよ。わたしもマナちゃんと同じ気持ちだから」
それがマナちゃんの選んだ道ならわたしは付き従うだけだよと、みゆきはマナの謝罪に笑顔で返す。
「ありがとう。それにしても、ここはどこだろう?」
レジーナが絵本の世界だって言ってたけど、確かに牧歌的な雰囲気の世界だと、マナは周囲を見渡す。
「あっ、あれは!?」
みゆきはハッとした。何故なら視線の先には、見慣れた光景が展開されていたからだ。
「ガラスの靴がピッタリだ!　おお!　あなたがあの時のお嬢様なのですね!!」
それは、王子がちょうどシンデレラにガラスの靴を履かせていた場面だった。
「わぁ、スゴイ!　ドッキドキだよー!!」
シンデレラの名場面に、マナは目を輝かせながら胸の鼓動を高鳴らせる。
「うん。確かにいいシーンだけど……」

ジョーカーのことだ、何か罠を仕掛けたはずだと、みゆきは警戒する。
「キイイィ！　なんなのザマス！　私の娘たちを差し置いて、養子のシンデレラが王子様に見初められるだなんて、許せないザマス！！」
「ええ、そうねぇ。シンデレラのクセに生意気よぉ！」
「ここはお仕置きが必要かしら！」
みゆきの悪寒は的中した。物語では悔しがっているだけの継母たちが、一斉にシンデレラに襲いかかろうとしていたのだ。
「危ない！」
ここでシンデレラが虐められたら、物語がバッドエンドになっちゃう。それだけは止めないとと、みゆきはすかさず飛び出た。
「なんザマス！　邪魔しないで欲しいザマス！！」
「これは家庭内の問題よぉ。部外者は介入しないで欲しいわぁ！」
「かしら！　かしら！！」
シンデレラを庇うみゆきに、継母たちは罵詈雑言を浴びせる。
「どかないよ！　絶対にどくもんかー！！」
みゆきは気圧されることなく、シンデレラを守り続けようとする。
「キイイィ！　生意気ザマス！　まずはお前からギッタギッタのメッタメッタにしてやるザマス！！」
「えっ！？」
みゆきへ矛先を変えようとする継母。刹那、継母はカボチャの馬車型のジコチューへと変貌したのだった。
「そうねぇ。まずはこの身の程知らずから叩き潰してあげるわぁっ！！」
「ぶっ潰すかしら！　かしら！！」
続けて長女がドレス型の、次女がガラスの靴型へのジコチューへと姿を変える。
「ジコチューでバッドエンドって、こういうことだったんだね。マナちゃん！」
「分かってる！　ジコチューにシンデレラの世界をメチャクチャにはさせないよ！！」
みゆきに呼応しながらマナも飛び出し、ラブリーコ

ミューンを構える。
「プリキュア、スマイルチャージ！」
「プリキュア、ラブリンク！」
　みゆきもまたスマイルパクトを構え、二人は同時に変身するのだった。
「行くよ、キュアハート！　数では負けてるけど！！」
　わたしたち二人の力を合わせれば倒せない相手じゃないと、ハッピーは気合を入れる。
「うん！　愛を失くした悲しいカボチャの馬車さんたち。このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」
　そうして二人は、三体のジコチューへと立ち向かうのだった。